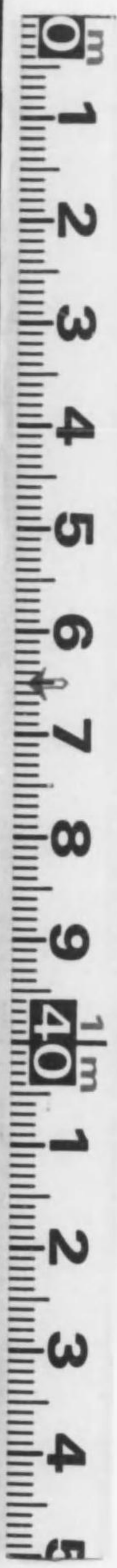


332
458

332-458



1200501390561



始





著史女ルヒダンア
譯樹昌山中

部版出館文教



332458

譯 序

本書はイヴリン・アンダヒル女史の「衷なる生活」(Evelyn Underhill's "Concerning the Inner Life")の翻譯である。小冊子ではあるが、内の生活の意義と必要とを説述せるものとして價値あるものと考へられる。アンダヒル女史は神秘主義の研究家として知られ、既に拾版以上を重ねた名著 "Mysticism" (神秘主義) を始め數種の著作がある。本書「衷なる生活」は一九二六年に出版されて既に七版を重ねてゐる。確かに今後も永く讀まれるであらう。小著ではあるが、暗示に富んでゐて、現時の精神生活に對する一大警鐘たるを失はない。著者自身が反復して云つてゐるやうに、現代の生活における中心的缺陷は「内的」なるものに對する一般人心の無關心乃至無神經である。そして殊に嘆はしいの

Translated and published by
permission of the publishers, Messrs.
Methuen and Co., Ltd., London,
and of the author.

は、この傾向が基督教界にも浸染しつゝあることである。就中、牧會傳道の教職の任務にある人々におけるこの缺陷は寒心すべきことである。女史はこの點に眼を留めて、熱心に、内的生活の涵養の絶對的必要を本書のうちに絶叫してゐるのである。聖ベルナルドゥスの云へる如く、我々自身は、靈的生命の貯水槽とならねばならぬと教へる。タウラアの謂ゆる「神において苦難する」必要を教へる。「靈魂の深處において神と密接してゐること」を自覺すべきことを教へる。「我は神より來り、われは神に屬し、我が窮極は神なり」と叫んだロヨラの精神を高調する。祈禱と冥想と渴仰とによつて「眼に見えざる世界と、見える世界との間を往來」すべきことを説いてゐる。斯くしてこそ始めて現代における「靈的賜物に對する全汎的飢餓」を救済し得ることを述べてゐる。

本書は元來、牧會傳道に従事せる人々に對して述べられたものであるが、眞面目なる信仰の生活に志す一般の讀者達にも播かれんことは著者自身の願つてゐるところであり、

また實際熟讀される價値を有してゐる。そこでこの譯書においてはその事を念頭において多少譯文に手心を加へることを妥當と考へた。たとへば本譯書において「傳道道」とあるは原文においては「聖職」もしくは「教職者」であり、また原著者は平信徒として自らを聖職にある人々と區別するやうに用語に注意を拂つてゐるが、本譯書においてはこの區別に拘泥しなかつた。然し區別する必要を感じる讀者には、これを識別することは困難でないと思ふ。この小著の譯書が、日本における教職者達並びに一般信徒達求道者達の内的生活を深からしむる一助とならんことを祈つて止まざるものである。

一九二九年三月

譯者

序

この小著のうちには包容されてゐる三篇の講話は、傳道牧會の教職にある人々のために設けられたる、北英國の或る學校において述べられたものであつたが、その聴講者達のうちの若干の人々の要求によつて出版を見るに到つたのであります。幾分の補筆が、殊に第二の講話に對して、加へられたが、然し三講話ともその元來の特質——講演といふよりも、打ち解けた、形式張らない談話といふ特質——がその儘保存されてゐます。

靈的生活についての諸問題のうちの或るものが茲に考察されてゐるのですが、それは特に、多忙な教區の牧職にある者にとつて知り置くことが必要でありまた義務であると思はれる點を顧慮して、述べられたのであります。また難問とせられる點をも顧慮して、述べ

られたのであります。然し此らの問題の多くは、本質において、概念の世界より體驗へと宗教的關心の推移した人々にとつて、また同じく問題であるが故に、教職外の人々も本書のうち何らか自分達の信仰生活の現狀に關與するものを見出し、斯くてこの門外漢として私の努力に對して、既に聽講せる教職の人々が拂ふことを惜まなかつたと同じ寛大な同情と宥恕とを與へられんことを私は希望するのであります。

一九二六年 聖靈降臨日

イヴリン・アンダヒル

目次

第一講 衷なる生活……………	一頁
第二講 祈禱の生活……………	三九
第三講 奉仕の生活……………	八五

「彼」のうちに我々は一切を識り且つ見、また「彼」によつて我々は我々の煩累と多忙と外的諸行動とを常に單純化し且つ統一することを學ぶのである。我々の勞作が、如何に偉大且つ神々しく見えるとしても、凡てこれを越えて、また貫いて、仰望しつゝ。

ヂェラク・ピイタセン

衷なる生活

第一講

「一般に「衷なる生命」もしくは「衷なる生活」として知られてゐるところのものに極めて密接に關聯してゐる諸問題の或るものを、以下の連續の講話において、私どもは考察しようとしてゐるのであります。特に、教區の牧師また基督教の教師傳道者にとつて必要である點に關聯して考へようとしてゐるのであります。また「衷なる生活」といふ言葉は、茲では、神に對する個々の靈魂の凡ゆる状態と關係とを意味するものと致します。即ち靈的感覺の深化と擴大化とを意味します。實際、個人的宗教の心核を意味します。普通の一個の婦人の平信徒としての私が、傳道者達の前に立つて、斯くのことき問題について語ることに、非常な氣遣れを私は感じます。元來、此らの問題は、傳道者達の特殊の關心事と

して専門的に研究せられるものであるからです。然し私は、たゞ此らの問題に多大の興味を抱き、そして此について思索する餘暇を有したといふだけのことで、僭越にも意見を述べ、私の到達した一定の結論を披瀝して、敢て参考に供したく思ふのであります。

先づ明白な事實を私どもの出發點と致します。即ちそれは、宗教の諸眞理を教へまた證明し、神についての知識を擴め、そして人々の靈魂のうちに働くといふことを専門的任務とする者にとつて、個人的靈的生命についての諸問題は、就中、極めて重要であるといふことです。まことに基督教徒としての如何なる種類の人々に對してよりも一層切實にまた直接的に傳道者達にとつて關係するところが深いのであります。傳道者にとつて先づ第一に必要なのは、自己の内的生命が健全なる状態において保持され、神と自己との接觸が堅實にして眞實であらねばならぬこととあります。然るに傳道者達は牧會傳道に従事し、従つて絶えず外的雜務に没頭せしめられるといふその故をもつて、この内的生命を培ひ養ふ

ことが、或る點において、傳道者達が働き教へる人々にとつてよりも、傳道者達自身にとつて、遙かに困難であります。この目的のために自由に費し得る時間は、傳道者達にとつては制限されてゐます。そして自餘の時間は、多かれ少かれ、往々にして極めて切迫せる種類の、信仰または慈善に關する外的用務に、全部専有されてしまひます。私どもの靈的源泉は絶えず涸渇します。それを如何しても私ども自らが補充せねばならないのです。然るに、私どもの靈的生命を活潑にして置かうとするならば、私ども凡てのものにとつて斯くも必要である修養と生活の變化とは、それよりそれへと宗教上の用務に絶えず移つてゆかねばならない傳道者達の場合においては、往々缺如し勝であります。

事情斯くの如しとすれば、傳道者にとつては、自己の心靈的狀態とその缺陷とについて明確なる見解を有し、自己の實相について明確なる觀念を有すること、そして自由な時間に、また能ふ限り時間をつくつて内的生命を培ひ養ふことは、極めて重要とはならないで

せうか。傳道者は、他の凡ての人々にまさつて、デオルチ・フォックスの謂ゆる「普遍的
光において萬象を見る」技能を學び、そしてこれが習性となるまでの水準に精神を高める
ことを要します。然るに多忙で逐はれる教區の牧師は、自己の心靈的狀態を省みること
を全然忘却してしまふのみでなく、彼が置かれてゐるこの偉大なる靈的背景を見失つてしま
ふことが、餘りにも屢起るのです。それと云ふのも、この靈的背景のうち、特に自身に
關りある細部のみに始終こゝろを集注するからであります。個々の樹木に極めて忠實に心
を留めたからと云つて、それで森林を見たとは云へない。個々の樹木に見てそれぞれの意
味を與へるところの森林についての感念を回復することが、確かに、敬虔なる生活に對す
る第一の任務であります。

この目的のために、私どもにとつて有益なのは、堅苦しい禮拜的型式や、或ひは極めて
周到な計畫の下に神學書を読むことや、或ひは何ら夢幻的な敬虔辭であるとは、私には考

へられない。有益であるべき根本的のものは、第一に「神の輝き」についての、次に、こ
の「神の輝き」に對して自己の靈魂についての、そして最後に、傳道者として選ばれたと
いふ自覺が要求するところの内的生命についての、能ふ限り明確で、豊富で、また深い概
念であると、私は信じます。神——靈魂——神の奉仕に選ばれたる靈魂——宗教の根本的
現實はこの三つです。もし此らの現實が私どもの心意と心情とを支配しないとすれば、他
の人々の靈魂のうちに神の業を爲し得ようとは如何して考へられるであらうか。

「傳道者として選ばれたといふ自覺が要求するところの内的生命」と私は云つた。何故と
いふに、茲にこそ、普通の基督教徒の内的生命とは、異るところのもの、或ひは異ならぬ
ばならぬところのものが、存するからであります。傳道者の靈魂——實際、凡ての宗教家
の靈魂——は、神と他の人々の靈魂とに對して、特殊の關係に立つてゐます。傳道者は自
己に特有の靈的諸問題をもつてゐます。彼は補助牧者達の一人であつて、羊群の一つの羊

ではない。彼は如何なる天候の時でも、羊群を擁護して、常に油断せず、常に奉仕し、常に養ひ、また救はうと努めねばならないのです。休む間なき、辛抱づよき、愛撫的な配慮、困憊、艱苦、危険を意としない忍耐、すべて此らのものが私どもに要求せらるるのです。靈的精力と同情とを與へよと彼らは絶えず呼び求められます。そして彼らは、この要求に適合する様式において、自己の營養、自己の宗教的健康と柔軟性とを保持し、斯くして他の人々の生命を深め得るやうに、自己の生命を深めねばならぬのです。聖ベルナルドゥスの顯著な言葉を借りていへば、私どもにして、眞に凡て己が職責を果さうと欲するならば、彼自身が溝渠でなしに貯水槽であらねばならぬのです。

さて宗教家が斯く成り得る道は只一つしかないのであつて、それは、神について自己の感覺を豊かにすることによつてであります。そして神についての感覺を豊かにしたいといふことは、確かに、現代基督教の絶叫してゐる要求であります。淺薄な宗教感、誤まつて

實際的基督教と稱せられてゐるケバケバしい倫理的信仰で満足しようとする傾向、精巧で、ピカピカ塗られた「この世」的な信仰が、現代における制度的宗教の主要缺陷の一つである。私に思はれます。意識的にか或ひは無意識的にか、その眼を神よりも寧ろ人間に向けてゐるところの宗教へと私どもは漂はされてゐます。即ち奉仕の方面を専ら高調して、神を畏るべきことに殆んど重きを置かないのです。斯くの如き信仰は結局、實踐上においても効果をもたらし得ない型の宗教です。それは、人生の苦痛と神秘とが極めて深刻に實感される儼かなる時に際して、靈魂に對して殆んど何の爲すところがない。タウラアが「神において苦難する」と稱したとき深奥なる經驗を容るる餘地を、それは有してゐない。それは聖潔へと導くことをしない。然るに聖潔は結局宗教の窮極です。此をもろくの靈魂を神に導くといふ崇高な特權に適はしきものとして遵奉する者らに對しては、神を畏ることを中心としない型の宗教は適切でない。然るに諸の靈魂を神に導くことは、牧會的

生活の目的でないでしょうか。實際、それは、基督教が人類に對して與へた最も深奥な賜物に背を向けてゐるのであります。現今、この淺薄な社會的類型の宗教の方向さしての一の斷乎たる趨向のあることを否定し得るとは私は考へません、そして、この趨勢を遏め得る唯一の道は、私ども自身が眞に祈禱の人となつて、既に彼らが彼ら自身の生命を獻げたところの、口に云ひ表はし難き此らの宗教的現實を、直接に、いよ／＼深く、又いよ／＼謙虛に、識るに到ることです、そして只この限りにおいてのみであります。それ故に、眞の祈禱の人となり續けることが、教區の傳道者の第一の義務であると私は考へます。

それでは、眞に祈禱の人となるとは、如何なることであるか。神と他の人々の靈魂とに對する自己の精神的交通を見ゆる點において神自身によつて統制し且つ活潑ならしめようと覺悟して意志し且つ斷乎として欲求する人こそそれでありませう。その超自然的靈境が、その自然的靈境よりも、自己にとつて一層多く現實的であり實質的であるといふほどに強

く、自己の靈的靈覺を發達せしめ且つ教育した人こそそれでありませう。祈禱の人とは、必ずしも數多の祈禱文を誦唱し、或ひは一々細々しい執成の祈願を獻げる人たるを要しない。然しそれは、神の嬰兒であつて、自己がその靈魂の深處において神と密接してゐることを識り、そして自己の祈禱と行動とにおいて、全然且つ完全に「創造的靈」によつて指導されてゐる者であらねばならない。斯くいふは、單に一片の敬虔な言葉としてではないのです。唯一の眞の使徒的生活について、私の爲し得る限りの、現實的にして具體的な叙述であるのです。すべての基督教徒は、その出發において、この機會を有してゐるのですが、然しこれを發達せしめるものは極めて些かしかないのであります。これを有してゐる傳道者と、これを有しない傳道者とを、一瞬にして平信徒は看破します。傳道者達が神に對して、または人々の靈魂に對して、爲し得ることのうち、この靈的靈境と態度との達成にまさつて重要なものは、一つもないのであります。

思ふに、基督教徒として私どもは、超自然的世界の優越性、内的生命における神の創造的靈の現實的現臨とその具體的顯現とに對する信仰に委ねられてゐるのではないでしようか。傳道者は、その擔當の教區に對して、この超自然的世界の主要連鎖であり、或ひはあるべきです。諸の靈魂に對する神の活動の主要溝渠であるべきです。教區に對する一層緊張せる靈的生命をもたらす希望の中心たるべきもの、この目的のために神が待みとしたりませぬもの、それは傳道者達です。これを思ふとき、慚愧の念に私どもは堪へないではありませんか。平信徒のうちにあつてすら、茲に想到して、恐懼の感に打たれる人々があります。そしてこの事が、そも／＼傳道者たるものゝ任務を省みて、深い謙虚な精神と畏懼の感を心のうちに生ぜしめ、聖靈の促進に對する確乎たるまた精妙な受容性が、その職務にとつて必要であることを、示すものといふべきです。

私どもは、現實の人生に行動し、變轉極まりなき世界に没頭し、連綿たる繁雜な業務に、

絶えず煩はされるのですが、而も永遠の價かなる地平線に圍繞され、眼には見えないが、永遠の力によつて生氣づけられてゐるのです。そして他の人々における場合にまさつて、傳道者たるものは、この變轉の世界を辿りゆきつゝ感じまた考へる凡てのことにおいて、その接觸する他の凡ての人々の靈魂に感化を與へ、また不變の實在にまします神に對する一般の人々の關係を決定するのです。私どもを通して、人々は、靈的生活へ惹きつけられもし、或ひは反撥もします。私どもは、人々の變り易き靈魂に對し、また變ることなき神に對して、この二重の關係に繋がれてゐるのです。私ども自身の人格と、また神に對する私ども自身の關係、これが直ちに傳道者達が訪問し、傳道し、祈り、また聖禮典を執行して授けるところの凡ての人々に、影響を與へるのです。出席者達にとつて心靈的經驗であるところの教會の禮拜と、きまつた文句の形式的反復より成る教會禮拜との間には、相違がありません。私ども平信徒は、愛と敬虔との行はれる教會と然らざる教會との間の

相違を、直ちに識ります。またこれによつて私どもは、その教會の牧師達の人となりを感じます。そして傳道者達の人となりは、その祈禱の秘かなる生活に據るものであります。全心全靈を盡して神を愛し、また己の如く隣人を愛せよとの二大誠を充分に實行せよとの召命を受けてゐる傳道者達は、第一の誠によつて完全に支配される限りにおいてのみしか、第二の誠を正しく實行することを、希望し得ないのであります。そしてこれを希望し得るやうに成るのは、自己の秘かなる内的生命の性質如何に據るのであります。

ところで、茲に私は云ひます、私どもの内的生命といふのは、強烈な緊張によつて特色づけられる精神状態を意味しはしないと。寧ろ、聖徒達中の最も慕はしき聖徒のうちに見るところの謙虚にして懇篤なる敬虔を私は意味します。基督教徒をして謂はゞ傳道的な感化力を有せしめ、人々をして傳道者達よりして神の愛を捕捉せしめるところの特質を、私は意味します。何故といふに、若し傳道者達にして眞に神の愛を有するならば、傳道者達

にして愛、歡喜および平安、聖別されたる生命の窮極的喜悅を感じるならば、これを人々は捕へずにはゐられない筈であるからです。而もこれを捕へること、遂に教會内の凡ての形式的禮拜の行動が、私どもの靈魂の自由な自發的な禮拜精神に充たされるまでに成るのであります。これは即ち一切のものに優つて人々の心を捉へるところのものであります。これは口に唱へられる極めて單純な祈禱、極めて平凡な讚美歌、極めて複雑した禮拜の儀式、超自然的眞理と同一の水準へと高めます。宗教家をもつて任ぜられてゐる人々のうちに彼らが見えた感じようと求めてゐるのは、眞の基督教的生活を耀かすところの、歡喜、喜悅、困難憂苦の業と苦難とを感謝に變へ得る力であります。これに優さる何ものをも人に與へ得るでしょうか。これは、現在、この世の私どもの生活における現實的な救ひを意味します。私どもの一切の精神的抗爭、一切の焦燥と反抗と不正の感念とに對する醫癒を意味します。

曲り、捻れ、虐使された靈魂に充滿する世界へと、私どもは遣されます。そして現今に
おいては往々傳道者達は、人々を一層善く助け得んがために、心理學を學ぶべきであると
云はれます。その心理學といふのは通常病理的心理學を指します。この研究が私どもに
とつて極めて有益な知識を與へ、そして人々を多くの不幸な過誤から救ひ得ることを私は
否定しません。しかし結局私は、その時間と力とを、神に對する自己の愛を深め且つ増
進することに費すことが、遙かに一層有益であらうと考へます。何故といふに、たゞ渴仰
と精進とによつてのみ、私どもは神についての個人的發見をするからです。神を信するこ
との歡喜と喜悅、また神への歸依を、斯くも甚しく要求する人々の靈魂に對して、私ども
は、自らこれを有してゐない以上、如何してこれを示すことが出来るでしようか。然しこ
れを有し得るためには、特別な訓練と意向の修養とに、時間を惜まず、忍耐と努力とを辭
してはならないのです。それは藝術家達が、自然美の實感と歡喜とに深く没入して、これ

をその作品のうちに具現しようとする場合と同じ。宗教の偉大なる事實と光輝とを、如
何なる眼をもつて私どもは見るのか。藝術家の眼をもつてか、または戀ひする人の眼をも
つてか、或ひは實業家の眼をもつてか、或ひは街上の人の眼をもつてか、その抱く驚異と
神秘との感念は、鋭くして深くあるか。斯くのごとき驚異と神秘との感念は、神に對する
斯くのごとき活ける喜悅は、無論、基督教的用語によつて云へば、一の恩寵であります。
それは自然人に對して附加せられたる、授與せられたる、或るものであります。然し凡て
他の恩寵と同様に、この恩寵を受くるか受けぬかは、私どもの意志と願望、私どもの心
意と情感とに據ること、私どもが心意と情感とを打ち開いて素直であるか否やに據ること
が、極めて大であります。それは私どものうへに強制せらるべきものではありません。そ
して私どもは、私どもの祈禱の性質において、またそれによつて、私どもの意志と願望と
を示し、私ども自身を素直ならしめます。デレミイ・テイアラの言葉「祈禱は、鳥の身

體に過ぎない——願望こそその翼なれ」を記憶すべきであります。

この言葉の眞意は、私どもの秘かなる祈禱は或る瞑想的色彩を帯びてゐねばならぬといふこと、またその主要な機能の一つは、神に對する自己の感念と願望とを培ひ又開發するものであらねばならぬといふことであります。この域に最も善く到達し得る幾つかの方法について後に考察したく思ひます。そこで茲では只、豊富なる内的生命の中心的特質として、この超自然力に對する仰望といふことを、私どもの心意に堅くとゞめ置きたいのであります。英國の神秘家ユルター・ヒルトンは、「エルサレムの都」、神の愛の都は「人間の業の完成と、些少の冥想とによつて」建設されると云ひました。私は云ひます、瞑想的祈禱とは、決して常規を逸した活動でも經驗でもなく、決して計劃的また人爲的な受動性ではないと。私の眞意は、神を全く神自身において、また神自身のゆゑに、渴仰するのであつて、斷然、神の如何なる賜物のゆゑにあらざる祈禱、そしていよ／＼深く神のみ

に憩ふところの祈禱を指すのであります。即ち、かの激潮たる體驗者聖パウロが「根ざし」また「基とし」と稱してゐるところのものであります（エペソ書三ノ一七）。此らの言葉を讀むときに私はいつも森林の樹木を想ひます。第一に、輝かしい、そしてずんずんと變つて成長する房々した芽が出て、枝を張り擴げ、これに繼いで葉の繁茂と豊かなる結實とを想ひ浮べます。次に、恐らく力と擴りとにおいては枝を凌駕し、堅く絡みついてゐるところの眼に見えない根の廣大な體系、その微細な纖維の扇形の體系と黙々として養分を吸収するその力とを想ひ浮べます。この奥深い、また秘かなる生命のうへに、樹木の全成長と安定とが基してゐるのであります。それは隠れたる世界に根ざし、また基してゐるのであります。

この光景を心に浮べてパウロは、内的生活に思ひを致すことが信者達と同勞者達とに對する彼の一の祈願であるを述べ、斯くて彼らが「その廣さ、長さ、深さ、高さ」——神學

によつては到達すべくもない體驗の輝き——を識り、且つ「凡て神に満てるもの」に充しめられんこと、換言すれば、靈的精力を直接、その超自然的源泉より汲まんことを、願望してゐるのであると思ひます（エペソ書三ノ一八、一九）。人の知ることく、聖ベルナルドゥスはこれを「一切の要務中の要務」と呼んでゐますが、これは、それが自餘の一切の要務を統制し、一切の要務に意義を與へ、實在に對する私どもの接觸を永久に新鮮にするからであります。私どもの敬虔なる生活は、靈魂の「根據」として、斯くの如く、神を翹望する習性を私どものうちに型成するものであるべきでないでしょうか。これを目指して、私どもの心意的機構の全體、感情、想像、意志および思想を教育すべきではないでしょうか。

聖イグナティウス・ロヨラは、彼の偉大なる「心靈的訓練」を「人間は、その主なる神を讚美し、崇敬し且つ奉仕すべし」といふこの目的のために、創造されたり」といふ一の根

本的眞理のうへに基礎づけたのであります。この言葉を聞いて何人も如何にも尤もであり、實に分り切つたことと思ひましよう。然しその眞意は、多くの宗教的辭句のやうに、とゞむるに由なく、逸し去られてしまひます。私どもにして心を落ちつけてこの言葉を玩味し、そして殊に、この偉大なる聖徒にして心理學者たるロヨラが此らの文字を使用し、これを選び整へた順序に注意するならば、この辭句の眞意を理解し得るのであります。即ちその意味は、人間の第一の義務は神を渴仰するにあるといふことです。第二の義務は、神を畏るることです。そして漸く第三の義務は、奉仕であります。而して私ども及びこの地球の表面に生存せる無数の人類全體は、他の何ものに對してでなく、たゞ神に對して捧ぐべき此らの三つのことのために、創造せられたのであつて、他の如何なることのためにでもなかつたのです。

ところで、私どもの靈魂の造られた目的である此らの三つのことのうち二つは、態度

の問題、關係の問題であることを見ます。即ち渴仰と畏懼とであります。この二つにして正しくない限り、此らの三つのものうちの最後のもの、即ち奉仕は、正しくあり得ないので。私どもの生活の全體にして讚美と渴仰との一の進行でないならば、神に對する畏懼の念を伴はないならば、その生活の産出する働きは、餘り善きものではないでしよう。そして若しこの事が眞理であるとすれば、基督教的啓示、即ち人々の靈魂のうちに基督の爲し給ふ働きの主要目的はまた、神の榮光を促進し、私どもの行爲を通して神の現存をいよく充分に明らかにし、私どもの打ち開きたる、愛に富める、私心なき、渴仰を増大し、被造物としての私どもの畏懼を深め、奉仕に對する獻身的精神を擴大することに存するこゝと成るので。そして私どもは、これを人々に與へ得る前に、これを充分先づ自身のうちに體驗せねばならないのでないでしようか。私どもは、ロヨラのもう一つの偉大なる言葉「我は神より來り、われは神に屬し、我が窮極は神なり」といふ眞理を字義通りに、自

己自身に體現して、彼らに示すべきであります。

斯くて、この事を第一に考慮に置いて、私どもは、その個人的敬虔生活の確立を企つべきであると思ひます。即ち神に對する傾倒が私どもの第一の宗教的行動であるといふのでありますが、斯く云ふのも、神に對する傾倒を缺いては他の一切の宗教的行動はその價値を失ふといふ嚴密に實際的な理由によるのであります。私どもの生涯の價値は、それが「神的光明」に浸る度合に、殆んど全く據るので。それは凡ての宗教的生活と思想との第一の條件であります。そして多分これは、現代の基督教徒の大部分のものが心を留めることの最も少いものであります。

而も、絶えず動き廻り、教區の無數の雜務に離脱し、また成文の祈禱書を始終反復することのうちに潜伏する單調と心靈的死との危険に曝露されてゐる傳道者達にとつて、その生命を支持したまふ不變の「永遠」の神に咫尺する習性を夙く型成し、これを規則正しく

培ふことは、如何に必要でありましょう。私どもの凡ゆる猷身の不斷の種々なる活動の窮極の目的は、その活動の對象である人々の生活のうちに「永遠者」の不變の情操を幾分でももたらすことです。特殊の便益と訓練とを有する傳道者達にして、若しこの事に力を盡さないとなれば、他に何人もこれを爲すものは到底ないので。そして私どもがこの使命を果す力を得るのは、この内的生命を自分自身が所有することに據るのです。晩禱の禮拜の終りに「屢唱へられる美しい祈禱に、この變り易き世に疲れた者らが「永遠不變」者に憩ひ得んことを願つたものがありますが、此らの言葉は、私どもにとつて單なる言葉に過ぎないのでしようか、それとも實際の事實を示すものでしようか。この質問に對して與へる解答によつて私ども自身の衷なる生活の健全性を、殆んど試験し得るのです。聖徒達の著作と、またそれに次いで、神を愛した多くの人々の著作は「永遠」者についての感覺が、潑刺たる事實として、靈魂の生命に全く接樹されて、習慣の水準にまで到達し得るこ

とを、反復して立證してゐます。私どもにして若しその使命を完全に遂行しようとなせば、少くともこの習慣の水準にまで到達せねばならないのです。何故なれば私どもの使命は、窮極まで突きつめるならば、人々の靈魂に、神の永遠的實在を實感せしめ、斯くして、世界に對する「靈」の不斷の救済にあづからしめることに存するからであります。私どもは超自然力に仕へる者であり、或ひは、あらねばなりません。私ども普通の人間は徒らに離脱して、毎日の雜務を切り抜けようと努め、そして諸の要件や、事件や、職責に對して、善くそれ相應に處して行きます。私どもは連綿として盡きることなき雜件に攻圍されて、大抵は、私どもを圍繞する神秘を忘却してゐます。私どもの概念し得る如何なるものをも遙かに越えてゐて、而も絶えず暗々裡に私どもを條件づけてゐるところの靈的實在と力との横溢を、私どもは失念してゐるのです。然し傳道者達はこれを忘却しようとしても忘却し得るものではない。超自然的な任務を帯びる傳道者達は、自己に委ねられた

る凡ての靈魂を、何を措いても、守り養はねばならない、そして他の諸の靈魂を己が保護の下につれ來ることが、主要任務であらねばなりません。そしてこの超自然的任務を帯びてゐるといふ感念を強めるやうに助成する主なる方法の一つは、宗教の大なる中心的諸眞理を明確に眼前に掲げて、その實現に自らを訓練し、絶えずこれに心をとめる習慣を型成し、その醫癒的また淨化的感化力を受けることでもあります。

斯くて、傳道者もしくは宗教家における強い、また豊富なる内的生命の發端は、上記の徹底的な實現に據ると私に思はれます。それは、空間に制限されず、また變ることなく、心靈的蒼空に光耀しながら、而も、煩累のこの世界のうちに緊密に現臨して、人生の凡ゆる様相を型り且つ起成せしめるところの豊かなる生命の神の指導的眞理についての、單なる容認でなしに、その充分にして直接なる理會を必要とします。私どもの宗教にして、若し力を與へ、また確實性を傳ふべきものであるとすれば、徹頭徹尾、神中心の宗教であら

ねばなりません。またこの客觀的な「力」と「現臨」とのうへに基礎づけられて、自己の主觀的感情、渴求、および要求や、若しくは一般信徒達の感情、渴求、および要求に基礎づけられざるところの、敬虔な修練によつて培はねばならないのです。私どもにして一たび、神のこの完全な獨立性を、自己の出發點としたならば、人生についての全概念は變化せしめられるでしょう。斯くて單に活動的奉仕を過當に重要視する結果、人生の些末な雜事について頻りに騒ぎ立てるときことは、消えてなくなつてしまひましょう。

斯くの如くに「神の現臨」に全高調を置き、絶えず彼に向ひ、彼のうちに没入し、最も切迫せる仕事もしくは實際的な諸問題すらをもつてしても——罪惡や失敗すらをもつてしても——私どもの心を神より離れしめることを斷然なさしめないといふ靈的自覺、このみが靈的活動に對する安全なる基礎であるといふことを、いよ／＼強く私は確信せしめられます。たゞこれのみが、私どもの行動を圍繞する神秘に對する畏懼渴仰の念を活かし置

き得るのです。この神秘について今日私どもの理會し得るところは、如何に努めても、極めて些少であるが、而も神の無窮と私ども自身の微小さと、そして私どもが知り且つ感ずるところのもの、不思議さとを、考へしめられるのであります。

十八世紀の一人の偉大なる女性であつた尼長ヂャネット・スチュアルトは、彼女の配下の新入の尼達に對して、「神について榮光に充つる思ひを抱き、靜かなる心をもつてこれに仕へよ」と云ふのを常とした。そして神についての私どもの思想がいよ／＼高く、またいよ／＼廣大であるに従つて、私どもはますます平靜に落付いて俗務を果し得るといふことが、確かに事實であります。然しそれは、神學的論争や、無味乾燥な學究的な思索や、無暗に理屈に捉はるる思辨や、偏狭な常套的な思想などを指すものではありません。凡て此らのものは、私どもの靈魂に啓發をもたらす代りに、却つてその萎縮を來させます。そして内面生活におけるこの萎縮もしくは啓發といふ實感が、私どもの靈的狀態についての、

間違ふことなき試金石であることを、私どもは皆知つてゐます。私の云はうとするのは、私どもには概念し得ないが而も「愛」にまします「實在」と「聖」とについての畏懼と喜悅とに充つる思想であります。この「實在」は極めて單純なる形體と事件とのうちに、またそれによつて、自らを注ぎいでしめ、そして極めて質朴な表徴の下に自らを顯示します、即ち、私どものうちに、また共に、完全に、現臨し、生活の凡ゆる瞬間において、私どもを決定します。斯くの如き冥想は、私どもの窓々をして常に「永遠」にむけて開かしめ、そして、私どもを護つて、聖獸の生活の蠶魚と鯖とである危険なる敬虔的瘟疫に陥らしめないのです。

この事にいよ／＼深く覺醒するのが「衷なる生活」です。私どもの生命と靈とを窮りなく凌駕する「生命」と「靈」とが、私どもの衷に徐々に成長し、また具體的に實現し、そして凡ての方面において、また凡ゆる時において、私どもの生命を吸収し、變化せしめ、

超自然化せしめることであります。それは神に對する思慕の念であつて、窮りなく私どもを凌駕し、極めて謙虚な畏懼の態度に絶えず私どもを置くが、而もいと深く、また密接に私どもと共にあつて、私どもの寄り纏る信頼と忠信な愛とを喚起せしめるところのものであります。これ即ち「超越」および「内在」といふ神學的術語が、祈禱の生活に於いて新たに體驗せられて、私どもに對して意味あるものとなる所以であると私に考へられます。まことに、斯くの如き個人的の新しき體驗こそ、牧會的任務の極めて重要な部分であります。他の人々の靈魂のために自己を聖化し、他の人々の靈魂を惹きつけて神に導くに適するものと自己を成す使徒的過程の一部分であります。何故なれば、私ども自身が神の愛を體得してゐる限りにおいてのみしか、人々を神の愛に到らしめ得ないからであります。また私ども自身が、この俗惡なる世界に「永遠」の靈をもたらし得る限りにおいてのみ、人々を助けて、この甚しき煩累の世界に意義を見出さしめ得るのであります。傳道者の任

務は茲に存するのであります。これ即ち牧師がその羊たる信徒達に與へるやうに委ねられてゐる靈的糧であります。現今、人々の靈魂がいたく飢ゑを求めてゐるのは、神のこの愛と、「永遠」者のこの「平安」と「臨在」とであります。そして彼らを眞に救ふ傳道者達の力は、神に對する自己の秘かなる生活に、絶對に據つてゐるのであります。更に、世界は騒々しき嘈音に充滿してゐます。一層善き旋律の存在することを私どもは知つてゐます。然し私ども自身が先づ自らを天の音楽に整調しない限り、これを決して他の人々に傳へ得ないのであります。そして更にまた、心をこめ、精神を集中して、これに對し、毎日幾干かの時間を獻げねばならないのです。信徒達の間には、禮拜を行ひ、聖餐式を守り、説教その他の務めを爲す場合、絶對的に靈的な確信を自ら保持して、これを彼らに與へてゐるといふ確實な自覺を、私どもは有してゐるでしようか。若しこの自覺を抱き得ないとすれば、それは傳道者たる任務を眞に果してゐないこととなります。

そこで若し靈的確信を人々に傳へねばならぬとすれば、私ども自身が先づ靈的に活きねばならぬことが明白です。そして靈的に活きることは成長と變化とを意味します。一の聯なれる信仰と義務との體系のうちに納まつてはをらずに、進歩發展に伴ふところの勞苦、抗爭、および困苦を忍び、また忍びつゞけることです。ペロン・フォン・ヒュゲルは「靈魂は一の「勢力」もしくは「精力」である。そして「聖潔」とは、豊富なる「存在」における、創造的靈的「人格」におけるこの精力の成長である」と云つてゐます。個人的宗教の一の主要な目的は、靈魂のこの成長の促進であります。その聰明な修養と訓練とであります。如何に私どもは多忙であるとも、いかに圓熟して有力と見えるとも、この成長は私どもが眞の基督教徒である限り、續けられねばならないのです。聖パウロおよび聖アウグスティヌスのやうな最大の靈的教師達ですら、彼ら自身の心靈的生命的緊張を決して弛めることを爲し得なかつたのです。彼らは決して停滯したとは見え、また決して抗爭

と變化とを恐れてゐないのです。彼らの靈魂はまた成長する實體であつて、愛と渴仰と創造的奉仕とに對して可能力を有してゐたのです、換言すれば、聖潔、即ち基督の相貌にまで自己の靈魂を變化せしめる力を有してゐたのです。聖徒と雖も、結局一個の人間であつて、只その靈魂が、その窘境に對して、神に對して、充分に響應して、成長し切つたといふに過ぎないのです。聖徒は、自餘の人々にまさつてより深い、より大なる生命を發揮し、宇宙の神秘に對する一層驚異すべき接觸に到達したのに過ぎないのです。これは無限の可能性を有する生命であつて、その窮極に到達したとは彼は決して感じないのです。

如何なる代價を拂つても、この成長をなさうとする願望と意志とは、また充分啓發された靈魂を待つてゐるところの、到底到達すべくもあらぬ偉大なる可能性に對する感念は、私ども凡てのものにとつて重要であるが、就中、確かに傳道者達に重要であります。宗教を教へ、人々の靈魂を導く者らは、神に對する彼らの觀念と體驗とを斷乎として擴大せ

ねばならぬといふことは、搖がし得ぬ眞理であります。而も基督教の傳道者達にして、當然「永遠」者として確かに進歩發展しつゝあるものが、幾干ありましようか。この事は、他の何事よりも善く、私どもの靈的活力を立證するものであると、私は考へます。もし私どもにして斯くの如くに成長してゐないとすれば、その缺陷の原因は、私ども自身の祈禱と精進との内的生命の窮乏にのみ存するのであつて、これが爲に靈的活力は低潮に停頓せしめられてゐるのです。祈禱および精進といふは難解な言葉であるが、然し結局その意味するところは、神との靈交および自己の訓練に過ぎないのです。この兩者は、人間の自然に有してゐる諸能力を超自然的任務を果すやうに整へるところの二つの根本的にて缺くべからざる行動の名稱であります。そして凡ての基督教の傳道者達は、その生活において、斯くの如き不斷の自己克服と自己征服との緊張せる、また私どもを謙虚ならしめる感化を受けねばならない。それは不斷の靜かな訓練を意味します。然し弟子たることは、

訓練的生活をおくることを意味します。そして私ども自身が先づ第一にこの意味における弟子とならなくては、他の者らを弟子達とすることは、到底覺束ないのであります。

聖徒的で純朴なアールの司教は、嘗て、多くの靈魂を回心せしめる彼の異常な成功の秘訣を人から訊ねられた。その時彼は、それは回心する人々には甚だ寛容であり、自ら持つること極めて嚴である結果であると答へた。この謂はゞ處方箋は、今尙ほ全効力を保有してゐます。外面的には溫和であつて、内面的には峻嚴であるといふのは、眞の基督教的氣性であるが、この力は、自分の個人的信仰の修養のために時間を裂くことを實行するかしなやかに全く據るのです。勇敢に、また忠實に求めるならば、必ず遂行し得ます。そして愛と聖潔との如何に高き程度へでも達し得ないことはなく、人々の靈魂に對して揮ひ得る力に、如何なる制限をも受けることがないでしょう。

此らのことが實際に可能であることを、聖徒が私どもに示してくれます。ひとりの人間

の靈魂が他の人の靈魂を救ひ且つこれを一變せしめ得るといふこと、またそれが爲に能く代價的困苦と苦痛とを忍ぶといふことを、示してくれます。聖徒達は特別な生活をおくつた人々であることを私どもは容認してもいふのです。然し凡ての基督教徒が送るやうに、神に呼ばれてゐる生活に、特に一生を投じたといふのが、聖徒達の生涯であつたのです。彼らは、謂はゞ、古典的狀態に到達したのです。彼らは軍勢の前衛です。然し私どもは、結局、主隊に加はつて前進しつゝあるのです。全軍勢が同一の超自然的名分に獻げられてゐるのです。そして私どもはこれを一の全體として翹望し、私どもの一人々々が聖徒と同一の制服を纏ひ、同一の特権を獲得し、同一の訓練を受け、また同一の食物にて養はれてゐることを記憶せねばなりません。彼らと私どもとの間の相違は、程度であつて、質ではないのです。靈魂の一定の熱達と深味とを、私どもは極めて著しく缺いてゐるのに、彼らは所有してゐるのです、これは、自己没却的愛、歡喜、および平安が、彼らのうちに完全

に花咲いたが爲です。彼らのうちに神の完成せる創作、純眞な作品を、私どもは見ます。然し聖徒達のこの力と美とは、人間的方面においては全く彼らの誠實なる祈禱の生活の結果であり、そして種々なる程度において凡ての基督教の教師達が到達し得るところのものであります。それ故に、私どもは皆、少しは、彼らのやうであるべきです。謂はゞ同族のものとしての似顔を有し、相似たる見解を共に有すべきであります。

もし聖徒達に對して、どうして心靈的力を發揮するに到つたのであるかと訊ねるならば、それは、人間の力に關する限りにおいては、愛と祈禱とによつてであつたとしか、彼らは答へ得ないのであります。極めて謙虚な純朴な愛と、渴仰と、信頼とに充つる祈禱とによつてであつたのです。愛と祈禱とは、彼らの唇に唱へられては、單に美しい言葉ではなかつたのです。それは人間の人格を、字義通りに、一變せしめ、そしてこれを本來あるべき状態にと、いよく到達せしめる巨大なる力の名稱であつたのです。この世界における

聖靈の器であつたのです。斯くて、此らの力を發展せしめるやうに、この愛と、この祈禱とに、自らを訓練するために、幾干かの時間を費やし、或ひは時間をつくることの必要であることが、明らかです。此らの力は、その本質上、謂ゆる「與へられる」ものであることは、事實ですが、然し賜物は、靈魂の忍耐ふかく骨惜みしない努力によつてのみしか充分に私ども自身のもので成されないので。靈的向上のためには、拂はるべき代價は随分高いものであります、但し靈的向上そのもの、眞價に比しては、決して高價なものではありません。靈的向上を圖ることは、如何に低く見ても、私どもの多くが弛むに委せてしまつてゐる力を苦心して發展せしめ、またこれを、屈せず、斷乎として、發揮することを意味します。よし外面的でないとしても、内面的な禁慾主義を意味します。現實的でないとしても、實質的な神秘主義を意味します。

人々は神秘主義を指して、恰も實際的宗教から全く離れたものであるかのやうにします。

然るに、實際の事實として、それは凡ゆる實際的宗教の張り切つた心臓であり、そして幾干かはこれに接觸してゐない者は何人も、感化力をもつて人々の靈魂を神に導き得ないのです。そも、神秘主義とは何であるか。それは、その最も廣い意味においては、宗教の主題であるところの永遠的實在と靈魂との接觸であります。そして神秘的生括とは、信仰の諸の對象を活ける實在に一變せしめるところの愛と祈禱——私ども自身の何らの利得のためにはなく、神自身のために神に對して向けられたる愛と祈禱——との完全なる生活です。それ故に、凡ての眞實な傳道者の内生的生活においては、確かに、幾分かの神秘的要素があるべきです。

私どもの凡ての外部的な宗教的行動——禮拜、聖餐、信仰修養のための諸儀式、慈善的行爲——は、愛に充つる信仰のこの内生的生命の表現であるか、或ひはその擁護であるか、いづれかです。斯くの如き外形的な表現と擁護とを私どもは有たねばならないのです、何

故なれば、私どもは純粹な靈的存在ではなくて、私どもの感覺を通して「實在」の使信を受けるところの人間であるからです。然し此らの表現と擁護との美しさは皆、衷なる生活より發します。そしてこの美を如何なる程度まで表現し或ひは理會し得るかは、私ども自身の内的狀態に據るのであります。内の生活のこの美しさが一層充分に具現せられたならば、善良にして熱心な人々が制度的宗教に對して現今示してゐるところの敵意の大部分が破碎されるであらうと私は考へます。この考への眞實であることを彼らに示すこと、また彼らが常に攻撃するところの死せる形式を、各自の愛によつて一變せしめ、そしてこれを「生命の靈」の聖杯とすることが、傳道者達の任務でないでしょうか。

基督の幼年時代について記せる經外典福音書の一つに、幼兒イエスが、他の少年達の持つて遊んでゐた土製の雀どもを採つて、空中に投げたまふや、それが活ける鳥どもとなつた話が出てゐます。傳説として、この話を私どもは無稽のものと見做し得ます。然し靈

的比喻として、これは深遠な眞理を含んでゐます。

第二講

神に對して傳道者の占むる超自然的な位置について、一般的に、私どもは考察した。即ち傳道者はその靈的資源を全然また直接、神に負ふてゐることを、また「靈」の適はしき器たり得んがために、自己の力のうちに存する自己聖化の義務について考察した。徐々にして而も確實な成長が、傳道者に對して要求されてゐることを私どもは見た。そしてこの成長は二つの方向——深さにおいて、また廣い愛において——において行はるべきであることを私どもは見た。傳道者は須く、神に對して、いよ／＼深まりゆき、ますます／＼畏れ、おの／＼、眞實な渴仰を抱くべきであつて、彼の靈的成長は眞實にこれによつて測り知ら

れるのであります。また傳道者は同胞に對して、いよく廣く、またますます裕かに、愛を注ぐべきであります。冥想家達のうちの最大なるものゝ一人であるルイスブレックは、祈禱の完全なる生活の結果は「普く萬人に對していよく擴りゆく愛」であると叫んだ。然し斯くの如き廣大なる愛に到達して能くこれを保持しようとの希望は、内の生活の深い境涯に到達し得た者にして始めて抱き得るのです。それ故に、斯る境涯に到達し得べき實際的方法と、また私どもの眼前に置くべき實際的目的とについて、次に、私どもは考へねばならない。

現代の宗教家達の位置に對して、現代特有の様相と見らるべきものが幾つかある。時代の進展と促進とは極めて大であつて、組織されたる宗教に必要であると考へられた細目の事柄が尙大に増加して、全然新しい形勢を呈するに到つたのであります。自己の信仰生活を深めるがために、時間を裂き、また靈魂の靜謐を得ることが、以前に比し、教區の牧師

にとつて、一層困難となつてゐます。而も、傳道者の使命が、第一に眞先に、人々の靈魂に對して配慮することであるといふことが眞であるとすれば、そして祈禱の人のみが、正當に、また有効に、人々の靈魂を導き取扱ふことを望み得るとするならば、靈的世界へ心を向けるために如何にして時間と靜謐とを得るかといふこの問題は、傳道者の一人々々にとつて、確かに何よりも重要であります。これは、實に、凡そ宗教のことを眞面目に考へる者が、如何しても解決せねばならぬ問題であります。凡ての人はそれぞれその境遇に應じて、これが爲に毎日どれだけの時間を費し得るかを決定せねばならない。次に進んで、自分の地位と、自分の必要と性質とを顧慮して、この時間を用ゆる最善の道が何であるかを見定めねばならない。これが爲に費し得る時間の分量と、この時間を用ゐる方法とは、人によつて違ひましよう。そして確かに避くべき第一の事柄は、書物で讀んだからとか、或ひは他の或る人に適してゐるとか云ふので、一定の型にはまつた方式を採用しないこと

です。

私ども自身の靈魂を凝視し、或ひは私どもの接する人々を観察して見出すのは、人間の心は、神に接近する適應性と方法とにおいて、非常に多種多様であるといふことです。ただ或る敬虔書と或る信仰的表象と實踐とのみが私どもに對して眞に意味を有してゐるかと思ふと、それと異なるものが他の人々の心を惹くのを私どもは見出すでしょう。私どものうちの或る人々は、何よりも先づ制度的な型に、或る人々は禁慾的および倫理的な型に、或る人々は神秘的型に、屬してゐます。そしてこの大まかな分類と型とのうちに、氣質および度合の無限の種類があるのです。私どもの見出さねばならぬ第一のことは、私どもの靈魂に適應する實行方法の種類です。その成長のこの段階において、他の何人に適する方法でなくて、自分自身に適する方法です。傳道者が心がけて努むべきは、全心を傾倒せしめるところの、而も緊張せしめ過ぎることのない祈禱です。神のみまへに心を全く從順な

らしめる祈禱です。精神を生きかへらしめ、ひきしめ、擴充し、靈的水準と氣分との避け難き動搖を最も善く乗り越えしめるところの祈禱です。しかし傳道者は、おのが心が極めて深く且つ根づよく惹きつけられるところの方法を探り、そして自分が消化し得る食物にて自分の靈魂を養はうと斯く決心するに際し、他の人々に對しては、心を全く素直にして、若し願はしくあることを見るならば、これとは全く異なる食物を與へ、別な修養の方法を奨励せねばならない。然かのみならず、彼らのために傳道者達は、自分の採れる方法とは異なる他の凡ての方法を學ばうと努めねばならない。傳道者達は、斷じて、信仰職業家となつてはならない。そして信仰職業家たることを避ける道は、眼を祈禱の偉大なる實體に注ぎ居ることでありませぬ。この偉大なる實體は「永遠の生命」に屬するものであるが、凡ての形式と方法とは、例外なしに、移り變はる世界に屬するものであつて、靈魂と神との靈交を表現し且つ助成するものとしてのみ價値を有することを、決して忘れてはならな

さて内的生活を條件づくべき目的について注意せよ。この目的は、傳道者の場合においては、純粹にして單純な瞑想的なものとなることで有り得ず、且つ有つてはならないのである。それは寧ろ行動と奉仕との全生活に瞑想の精神を滲透せしめるものであらねばならないのです。基督教の傳道者の使命は、祈禱と奉仕との融合の生活であつて、その古典的な模範は、基督において見られるもので、私どもの知る最も高い、最も困難な、最も完全な人生であります。それは靜思と行動との生活であつて、意志と想像力と心情とを結合し、これを只ひとつの目的に集注せしめるものであります。落付いた祈禱と瞑想との時間において靜思します。行動と發展との時間において活動します。斯くの如き方式は、忠實に遵守するならば、これを追及する者らの人格を徐々に然し確實に一變せしめるでしよう。それ故に、ひそかなる祈禱に獻げる時間は、傳道者達の靈を養ひ、啓發し、いよく彼らをし

て、「人間が自分の手を自由に用ゐるが如くに、「永遠の善」にまします神の手」たらしめることに寄與するものとして常に考へられねばならないのです。即ち神のたわやかなる又活ける器となるのであります。それは精神を集注する時間であつて、靈的精力を結集し、後にそれが禮拜に又教會上の仕事に溢れいづるものでなくてはなりません。それはいよいよ深まる靈的交通であつて、神への歸依の心を固め、また養成するに到り、それを毎日の外的な仕事に正しく實現せねばならないのです。

殊に、私は思ひます、秘かなる祈禱の時間は、禮拜の祈禱を指導すべき傳道者をして、いよいよ神を仰いで緊張して生活するやうに訓練すべきであります。會衆の信徒達に祈禱とは眞に何であるかを理解せしめ、また祈禱の生活に入るやうに助け、彼らの信仰をして鋭敏活潑ならしめるためには、説教や、教訓やに據り、また奇抜で人々の興味を惹きさうな手段を講ずるよりは、傳道者自身が禮拜の間神に無意識的に没入してゐることが、遙か

に大切です。會衆は、傳道者が彼らのために盡すことのうち彼らを益することの最も多いのは何であるかを傳道者に語ることは多分餘ほど遠慮するに違ひないが、然し傳道者の自省と敬虔なる祈禱とが、彼らを益するものゝ一つであることは疑ひない。彼らの多くのものにとつては、傳道者とともに教會堂のうちに過す時間が、祈禱とは如何なるものであるかを見る唯一の機會であります。そしてそれは傳道者にとつて、彼らに、祈禱の如何なるものであるかを示す大切な機會です。眞に神を愛し、眞に畏懼と喜悅とを感じて、神に語る靈魂を見ることは、驚くべく感銘的であります。斯かる靈魂は、牧師の眞の職務を果すことを識つてゐます。ペンがヂオルヂ・フォックスについて「自分が嘗て感じ或ひは見た最も畏るべく活ける尊嚴な姿は、祈れる彼の姿であつた」と云つたのを記憶します。これは、超自然の世界に集注されたる人間的靈魂の簡潔な活々として描寫です。斯ういふ風に信者達を裨益しようとするならば、傳道者は孤獨の時間において、外的な宗教生活を斯くの如く

超自然化するための力を獲得せねばなりません。

以上述べたところによつて知られるのは、傳道者の祈禱専念の生活の目的は、全生活の統一完成であつて、決して祈禱を行動から分離せしめることでなく、決して兩者の間の隠然たる對立ではないといふことです。また時間を定めて祈禱のために別にして置くことは、自力による努力と上達以上に、益をもたらすものと見做さるべきであるといふことです。これこそ傳道者の使徒的任務の本質的な部分です。生活の凡ての場合に自然の力以上のものが限なく貫いてゐるといふことは、眞に人を説き伏せる力をもつてゐる宗教の徴證です。そしてこの力は、整然たる數多の禮拜からも、また基督教的政治思想の宣言からも、更にまた傳道者氣質の暖い友愛の精神の心をこめた涵養からも、得られないのです。此らのものは、どんなに尊いものであつても、この力を與へ得ないのです。これは必ず、そして只、極めて純眞な、嬰兒のやうな、不斷の祈禱の内的生活より來るのであります。

心理學者達は、私どもの心意生活の健全と均衡とは、そのうちに於ける内向と外向との適度の比例に據ると私どもに告げます。ところで、現代における私どもの生活は、通常、そして不可避免的に、過度に外向を強ひられてゐます。私どもの注意は、外面的に、絶えず數多の瑣末事と要務とに向けしめられます。幾つもの俱樂部と少年子女のスカウトと組合、週日の諸會合、月刊雜誌、そして教區全般に網のごとくに擴がれる管掌事務に忙殺されてゐます。そしてその結果は、傳道者にして非常に用心しない限り、深き信仰の缺如となり、靈的窮乏を招き、またそれと共に、冷淡なる傾向を馴致して、禮拜式または組織の外的な細目を不當に重要視し、社會的また制度的宗教をもつて、敬虔の宗教に代へるに到るのであります。この傾向は、現今、組織されたる基督教的諸階級を通じて正に勢力を揮つてゐます。そして組織されたる基督教よりして、その正に支給されてゐる超自然的精力を奪つて不可避免的に、その救贖力を滅殺してゐます。これを救済する道は、凡て斯くの如き多

忙過ぎる人々の秘かなる宗教生活をして一層内向へと目指さしめ、斯くして心的均衡を整正せしめることに存します。彼らの祈禱は瞑想的且つ反省的な型のものであり、斯くて能く、彼らをして彼らの制度的な活動に深さと内面性とを與へしめるものであり、また彼らの内的生活が成熟するにつれて、いつでも閑暇な時間のあるときには直ちに靜思する無上に貴重な技能を發達せしめるやうに彼らを助けるものであらねばならない、この技能は、神に對する私どもの歸依のこゝろを回復し且つ堅固にする力において無比です。斯くの如き企劃は、何ら激烈な種類の敬虔たるを要しないし、又たるべきでない。それは私どもの靈魂の聰明な修養であつて、私どもをして一切の必要に應ぜしめ、危険なる靈的困憊を私どもにもたらさないものであります。

聖ボナヴェントゥラは有名な言葉において、祈禱の人々を三つの主要な型に分けてゐます。第一は、主として祈禱に専念する者らであり、次は、主として思索に専念する者らで

あり、最後は、此らの二つのいづれをも越えて、神との恍惚的靈交にまで高まる者らです。この分類は、願ふ祈禱、求むる祈禱、および戸を叩く祈禱に關する基督の三重の約束に、明白に基づいてゐます。そして基督のこの約束のやうに、この分類は、表象の下に、一の深奥なる心理學のおよび靈的眞理——即ち靈魂の強き願望の力と範圍——を表示します。凡て三つの型——執成者、神學者、および瞑想家——を一緒にしたものが、要するに教會の祈禱の生活を成すといふのがボナヴェントゥラの意見です。やゝ少しく度を減じて、此らの各要素の幾分かゞまた、凡て完全なる靈的生活に必要であるといふことが眞理であるとわたしは思ひます。此らの要素は、意志、智性、および心情に超自然的客觀性を與へるからです。或る力強き願望と祈願、或る智的希求、或る非功利的な渴仰的愛は、私どもの各に必要です、そして殊に傳道者達に必要です。此らの各要素の比例は、靈魂と靈魂との間に相違があるであらうが、然し、私ども自身の信仰修養の規範として、この全概念を私ども

の心意のうちに留め置くことが、確かに有益であります。

さて以上は一般的目的に關してであります。これに到達する手段方法は如何にすべきであるか。凡そ充分で健全な宗教的生活のうちに處を占めねばならぬ四つの主要な事柄があると私に思はれます。そしてこの事を心に留め置くことは、私ども自身の内的生活を均衡の取れた健全なものたらしめ置くのに助けとなると思はれます。第一に、私どもは、正しき態度に到達してこれを保持する方法を研究し、第二に、正しき靈的食物——乾物として、豫め消化されてゐる敬虔でなくて、自分で噛み碎かねばならぬところの、眞の、營養ある食物——を獲得し、且つ保持する方法を研究します。「我は成長せる者らの食物なり。なんち育ちて我を食物とせよ」と神の聲が聖アウグステイヌスに云ひたまふた。第三に私どもは成長を助け、私どもの靈的諸能力を訓練して、いよ／＼益々展開し力強からしめるところの教育を要します。第四に、私どもは、或る定つた靈的な仕事を有すべきであり、そ

してそれに私ども自身の適合するのを見ねばならないのです。

さて此らの四つの必要の各に對して、それぞれ異なる祈りの型があります。神に對する靈魂の正しき態度は、純粹な渴仰の祈禱によつて獲得し且つ支持されます。その成長のために必要な食物は、私どもの心靈修養のために讀書し且つ冥想することにより、並びに、一層直接な靈交の方式によつて獲得されます。斯くの如き冥想は、また心靈的諸能力の教育における一の重要な段階を構成するでしょう。私どもの各のものが行ひ得るところの形式的、人爲的、或ひは反省的祈禱によつて、靈的諸能力は、或る程度まで、更に尙ほ訓練されます。最後に、祈り深き靈魂によつて爲され得る仕事は、執成と贖罪的自己犠牲との全分野を蔽ひます。

そこで基本的のものとして、第一に、神に對する正しき態度に到達し且つこれを持続する道について考へねばなりません。神の超越的實在に對する深奥にして畏懼すべき感念、

謙虚な渴仰の關係であつて、この上に他の一切のものが憑依してゐるのです。靈的生活を眞面目に考へる凡ての人々にとつて——そして就中宗教家にとつて——渴仰のこの祈禱は、教育的また淨化的力において、凡ての他の型の祈禱に優さるといふことに、毫も私は疑惑を感じないのです。これのみが能く超自然に對する私どもの感念を堅固にし、私どもの執拗な自利心を克服し、私どもの靈の力を展開し、驚異に對する覺醒と神を悦ぶ心とを活かしめ得るのです。すべて完全なる靈的生活のうちには、明白に現存せねばならぬ二つの動向があります。その祈禱の精力は、一方においては、神の方に向けられねばならず、そして他方においては、人間に向けられねばならない。第一の動向は靈魂と神との間の靈的交通の全範圍を包容するもので、それに據つて私どもは、渴仰のうちに神的實在に向かひ、謂はゞ、私どもの靈魂を「永遠の光」のうちに浴せしめます。第一の動向によつて獲得したる安心と精力とを増し加へられて私どもは、第二の動向により、自然的世界へと歸

り、そこに、神のために、また神とともに、そして他の人々のために、靈的な仕事を爲します。斯くの如くにして祈禱は、人間の内的生活の全體と同様に「眼に見えざる世界と、見える世界との間を往來するのです」。さて此らの動向は何れも勿論すべての基督教徒にとつて必要です、然し大切な點は、第二の動向は、第一の動向が中心的位置を占めてゐる場合にのみ、善くその働きを爲すといふことです。靈魂の、眼に見えない諸能力の深化が先づ最初に行はれて、世界としてのその外的往動を安全ならしめねばならないのです。

この事は、執成や祈願でなくて、渴仰が、祈禱の生活の眞の中心であらねならぬことを意味します。何故といふに、祈禱は一の超自然的活動であるか然らざれば無であるからです。そして祈禱は本來超自然的目的に向けられねばなりません。祈禱はまた靈魂の基底的法則を熟知してゐます。即ち祈禱は神より來り、神に屬し、神を目指します。祈禱は、神を神自身のために、また神自身において目指して、渴仰の雰囲気の中に、終始し、また

包まれねばならない。上なる光と愛との傳達者達としての私どもの窮極的能力は、直接この渴仰的專念に憑依します。渴仰的專念の斯くの如き祈禱において私どもは、私どもの扉を開いて、神の「遍在の靈」を受け、私ども自身をへりくだらしめ、そして私ども自身の無を認識します。斯くの如く自己を神に委ねた靈魂のみが、神が働きかけたまふところの神秘的聖體の一部分と成るのです。それは、結局、恩寵を受ける者またその傳達者となることです。

これは實際的なことでないでしょうか。基督教徒に對しては、確かに、唯一の實際的なことです。然るに往々にして私どもは、傳達しようとする急ぐ餘り、これを受くべき私どもの本來の義務を忘れます。また私どもを通して神が自己を示したまふことは、私どもの渴仰的愛と謙虚なる受容性とに直接比例するものであることを忘れてゐます。私どもの靈魂が縁まで充滿する場合にのみ、靈的賜物を他の人々に敢て提供し得るのです。宗教家達が餘

りにも屢感するところの無力感、かの絶望的な靈的困難に對する救策は、祈願でなくて渴仰の祈禱によつて支配される内的生活であると私は確信します。私どもに對してなされる諸の要求が、眞に私どもの内的平衡をおびやかすのを見出す場合には、靈的飢餓と窮迫との徴候を私どもが感ずる場合には、それは立ちとどまつて、私どもの靈の家郷であり父である「永遠的實在」に對して、私どもの靈魂の根本的關係を立て直すべき時であると、確かに私どもは思つていゝのです。「我らの心は、汝においてのほかに休息を見出さざるべし」。私どもの心情が斯く現實的に神のうちに、平安にして自己没却の渴仰のうちに、休息する時にのみ、私どもは、他の人々に對して、神の慕はしさを示すことを望み得るのです。斯くの如き渴仰の祈禱の澎湃たる潮流において、靈魂は、現在の煩悶と災厄とより解除されるのです、そして私どもの誰もが免れ得ない一切の些末なる爭論と些末なる焦慮と些末なる虚榮とより遙か遠くに私どもの魂は高められます。私どもの魂は神にまで携へゆか

れ、神のうちに秘められます。これのみが、靈魂がその平安と力との基底であるところの全然の自己没却に到達し得る唯一の道です。そして私どもが祈禱をもつて、自己を窮りなく神に獻ぐる行爲であると考へる代りに、元來私ども自身と他の人々とに對して神より賜物を引き寄せる手段である限り、この自己没却の域に到達し得ないのであります。如何に多くの精神的穿鑿よりも、謙虚なる渴仰のこの斷乎たる態度によつて、私どもは徐々に、そして無意識のうちに、一層多く神について知得することを期待し得ると私は確信します。何故といふに、これによつて私どもの靈魂は、たとひ一瞬間であつても、微弱な被造の靈とその「永遠的源泉」との根本的關係を回復するからです。そしてこの關係を回復し、これを正しく保持するために費される時間は、有益に費されたものであると云はねばなりません。斯くの如き時間において私どもは「永遠」の雰圍氣を深く呼吸します。そして斯くして私どもは、謙虚と常識とが同一のものであることを見出します。私どもは、私どもの徴

弱、私どもの無であること、また神の偉大と確實にましますことを、體驗し、再體驗します。そして私どもは凡て、斯くのごとき體驗が、神について他の人々に敢て教へるといふ重大なる靈的難事業に面する人々にとつて、如何に貴重なるものであるかを知つてゐます。更に、この渴仰的祈禱と、これに伴ふ欣然たる自己犠牲とを、窮極の源泉として、私どもの靈魂の他の諸の祈り深き傾向が注ぎいづるのです。深い、謙虚な悔恨、私どもの被造物的不完全と無價値との感念、私どもに與へられたる一切のものに對しての感謝、他の諸の靈魂のために自己を獻げんとあこがるる燃えまざる愛——凡て此らのものは靈的活力の徴候であります。そして靈的活力は、神に對する私どもの靈的愛着に據ります。斯くて眞剣な奉仕の生活へと召命を受けた者らに對して確かに第一に重要なものは、思慕と渴仰との祈禱、歡喜と畏懼とに充つる祈禱を深めゆきて、斷乎として日毎にこれを行ふことを妨ぐることを何ものにも許さないと決心することです。これに據つてのみ靈魂の精力

と平安とを保持し、また神を指いて神への奉仕に努めるといふ誘惑をとゞめ得るのであります。もし毎朝祈禱のために半時間しか費し得ないとすれば、その半時間の半分を斯くのごとき渴仰に過さうと決心するのは過當でないと私は考へます。何故なれば、それは神が人間の靈魂に對して求めたまふ中心的禮拜乃至奉仕であるからです。そしてそれを忽諾にすることは當然、靈的深みと力との多大なる缺陷をもたらします。更に、渴仰は、他のいづれの型の祈禱よりも、一層深く、活力を與へ、平安をもたらし、確信を強めます。「創造主と被造物、永遠と時間、被造物ならざる光と他より點ぜられたる光との品位は、異なる、甚しく異なる」とトマス・アケムピスは云つてゐます。然しこの事を知るは、渴仰的愛に修練した人々のみであります。

以上の説は甚だ善く、そして斯くのごとき祈禱の美しさと願はしさとについては、一般的な宗教的立場において、全然同意するが、然し夥しき外的な用務のために絶えず煩はさ

れてその方に氣をとられてゐる私ども自身を、斯くの如き堅固なる神中心の態度に如何にして修練し得るであらうかと、當然難詰されるかも知れない。そこで更に進んで、祈禱の生活を十分に持續するために必要な諸要素——その食物とその教育——について考慮せねばならなくなる。もし私どもにして、靈交のこの力を發展せしめ、これに向けて私どもを差し招く恩寵に適合しようと欲するならば、私どもの靈魂を心をこめて、また規則正しく、神について私どもが體得し得る崇高な思想にて養はねばならない。また私どもの動搖する注意力と感情とを訓練して、神に獻げたる意志の要求に服従せしめねばならない。私どもは靈的に適はしきものとなり、また成り續けねばならないのです。

無論、私どもの靈魂を斯くの如く養ひ、また斯くの如く訓練する方法は、多種多様です。豊富なる「實在」が私どもに提供するものを悉く體得しようと望み得るものは一人もない。そこで最も深く渴仰へと導かれる道は、或る氣質の人々にとつては、空間を超越して變る

ことなき神の臨在を瞬かに思念することであり、或る人々にとつては、基督の仰望であり、または諸福音書に記されてゐる基督の行動と言葉とを單純に冥想して、基督との慕はしき靈交のうちに自己を没却して失ふことです。或る人は聖禮典によつて最も善く渴仰を味得します。私どもは此らのことを悉く充分に感得することはできない。それ程に私どもの靈的包容力は廣くはないのです。それ故に、私どもは、私どもを補益すること最も多き反省的冥想と精神的祈禱との方式を、謙虚に、また單純に、實行し、そして閑暇の時間には、何を措いても、自らその方式へと心を惹かれるのを見るやうにならねばならない。強制によつてではなく、養ふことによつて、私どもは成長します、そして主として私ども自身を、私どもが消化し得るところの食物にて養育し、他の食物をば、これを宜しとする人々に自由に採らすべきです。然し斯く爲すものゝ、靈的修養の方法のうち、私どもの心を惹くこと最も少き型のものをも、全然看却しない方が賢明であるでしょう。斯くて「永遠無限

の靈」といふ觀念に強く惹きつけられる哲學的傾向の靈魂の自然的な祈禱は、これを少しく歴史のおよび啓示的な方面の考慮によつて、また精神と感覺とを満足さす聖禮典によつて能く均衡せしめることをしないならば、餘りに稀薄、抽象的で、人間味を缺くものとなります。生れつき瞑想的な人々は、聲にいだし或ひは成文の祈禱の訓練を受けずしては、靜寂主義へ流れ行きます。更に、基督中心の敬虔は、その禮拜の對象が「永遠」の地平線内において眺められないならば、深さと畏懼とを喪失します。それ故に、私どもの小さき靈魂を養ふ源である豊富なる全體についての感念を多少こゝろのうちに宜しく抱き居るべきです。

然しながら、凡て此らの種々なる型と程度との靈的修養のために用ゐて己がものとなし得る一種の祈禱がある。そしてこれは心理學のおよび宗教的效果において比類なきものです。それは謂ゆる「憧憬の祈禱」と稱せられるところのものであつて、愛もしくは禮拜に

關する短い文句を反復して、心をとめて唱へることです。これは謂はゞ、私どもの心意を正しき道へと向かはしめ、そして靈魂の渴仰的氣分を私どものうちに形成し且つ持續する力を決して失はしめぬやうに、私どもを助けます。詩篇、聖アウグスティヌスの懺悔録、トマス・アケムピスの「基督に倣ひて」は、斯くの如き憧憬の祈禱に充ちてゐます。此らの書は、神についての最も個人的な觀念よりして、最も非個人的な觀念に亘つてゐて、凡ゆる氣分と必要とに應合します。私どもの靈的筋力をいやが上にも緊張せしめ、そして最も息氣苦しき窘境にあつてさへも、私どもをして山上の空氣を深く呼吸せしめます。憧憬の心を常に抱くといふ習性をつくり上げることは難事であるが、然しつくりあげられた曉には、靈魂の生命に、いやまさりゆく感化力を揮ひます。アッシジの聖フランシエスコが終夜「わが神、わが一切よ、汝は何にましますぞや、而して我は何なるぞや」と反復したのを想ひ起せよ。これは渴仰の一の完全なる祈禱ではないでしようか。おのが創造者

なる主を仰ぎ見て、畏れ且つ悦べる被造物の謙虚なる叫びです。「汝のほかにわれ誰を天にもたん、地になんぢの他にわが慕ふものなし」(詩篇七三の二五)との詩篇の作者の叫びを想ひおこせよ。此らの言葉を思ひめぐらすとき、一切の紛亂と煩はしき鎖事とは潰え去り、また消えゆくではないでしょうか。また此らの言葉は、祈禱において最も重要なものは私どもが語り若しくは願ふところのことではなくて、神に對する私どもの態度であるといふ真理に、私どもを想到せしめるのではないのでしょうか。以上述べしことを要約すれば、私どもの個人的宗教は神中心でなくてはならぬといふことです。これは偉大なるベリユウルが述べた次の規範に確かに一致します。即ち、神に對する人間の眞の關係は、たゞ渴仰と歸依とのみ存する、また靈魂のこの二つの氣分もしくは態度は、人間の内の生活の全範圍を蔽ふものであり、そして祈禱によつて喚起せしめられ且つ表白されねばならぬといふのです。

私ども自身の敬虔なる祈禱の生活を正當に養ひ育てるといふ問題は、無論、正しく常に聖書を読むことを包括せねばなりません。そして聖書を読むといふことは、聖書もしくは宗教的眞理を型に従つて或ひは格張らずに冥想することのいづれを含みます。沈思冥想、味得——謂はゞ反芻するかのやうに——して、私どもの攝收したものを消化し、そしてそれを私ども自身の用に供します。信仰書の精讀は、内の生活を發展せしめ、また支持するものとして、たゞ祈禱に次ぐのみです、或ひはたゞ祈禱だけの次に置けるのです。信仰書のうちに、私どもは、貯藏されたる人類の一切の超自然な寶、人類が神について発見した一切のものに、接近し得るのです。精讀は、聖書のみに限定さるべきでなくて、また少くとも、聖列に加へられたる、また加へられざる、諸聖徒の傳記と著作とが包容せらるべきです。宗教においては、多種多様の營養の方が、食事にやかましい胃病患者の單調な定まれる食物より遙かに優さつてゐるからです。もし私どもにして正しく讀みさへすれば、聖

徒達に關する書は、眞に靈的交通の一の働きとなりませす。それによつて只に私どもは聖徒について知るのみでなくて、彼らと靈交し得るのです。基督教的な家族の誇りであり光榮であるところの過去の偉大なる諸靈魂との現實的な靈交に入ることが出来るのです。彼らの生涯と事業とを徐々に且つ同情をもつて研究し、基督教的な家族の歴史、またその書翰を読み、その思想を把握しようとする努力は、漸次、此らの人々が、その功績においては兎も角、もともと私ども自身と極めて似たものであることを發見します。彼らは私どもと同じ禮拜奉仕に献身し、私どもと非常に似てゐる困難によつて屢々阻碍された者らであつたことを知ります。而も彼らの勝利と識見とは、私どもを謙虚にし、罪を自覺せしめます。また彼らを私どもが愈々愛するに到るにつれて、彼らは能く「實在」に對する靈魂の關係について、ますます深く私どもに語り告げます。聖アウグスティヌスの懺悔録、シエナのカタリナの對話、タウラアの説教、ヂェルラック・ピタアセンの「神との火の如き

獨語」、ノルヴヰツチのジュリアンの「默示録」、聖テレサの傳記、ブラザア・ラウレンスの小著、フオックス、ウルマン、およびウエスレイの日記——この種の書の瞑想的な、落付いた、受容的な精讀は、私どもの對人的環境また心靈的環境を無限に擴大します。これは聖徒達との靈交を最も直接的に私どもが感じ得る道の一つであります。熱心鋭意なる基督教徒達のうちに住み、彼らと親交することが有益であることを私どもは皆知つてゐます。私ども自身の生活において彼らとの接觸に負ふところが如何に多大であるか、また非基督教的な精神の優勢な雰囲気の中に單獨に抗爭することが如何に困難であるかよ。聖徒達のうちに私どもは常に熱心鋭意なる基督教徒達の緊張せる團結を見ます。こゝに私どもは、謂はゞ古典的標準に常に接觸します。彼らの個人的感化は、彼らが地を去りて後幾多の世紀を経て、尙ほも光射して私どもに、神の靈が人間を通して人間に働きたまふ道の無限に多種多様であることを想はしめ、そしてまたこの點における私ども自身

の畏れかしこむべき個人的責任を想はしめます、聖徒達は、偉大なる實證的基督教徒達であつて、その徹底的な自己聖獻のゆゑに、神について偉大なる諸發見をしたのです。そして彼らの傳記と著作とは、これを讀む私どもに、私どもの堪へ得る限りにおいて、同じくそれらの發見を頌ち與へます。まことに、私どもがいよいよ成長するにつれて、聖徒達の私どもに告ぐるところが益々多くなり、新たに讀む度毎に、私どもの思ひも及ばなかつた奥義を啓示します。彼らの書は、謂はゞ、敬虔的生活の専門家達の書であつて、それよりして、私どもは、謙虚に、神について、また私ども自身の靈魂について、いよいよ多く學び得るのであります。

そこで傳道者の信仰修養の書物として始終用ゐるものうちに、今し私の擧げたものうちの、少くとも或るものを、宜しく包括すべきであります。即ち精神生活の地平線を擴げ、また私どものうちの多くの者らが勞苦すべき靈的畑地から連れ去られて、山嶽と海と

を私どもに想ひ起さす書です。また此らの書に加ふるに、私どもの讀書は、深いまた聖徒的な諸の靈魂の全經驗の凝結である靈的指導の謂はゞ専門的な書類にまで及ぶべきです。即ちトマス・アケムピスの「基督に倣ひて」、内的生活についての驚異すべき古き水先案内書であるアウグスティン・ベエカアの「聖き智慧」、或ひはクルウの「靈魂の秘れたる生活」のごときこれです。此らの書は、決して用済みとなることがないものです。幾度も幾度も讀んで、私どもの心意の謂はゞ織維そのものうちに編みこまらるべきです。斯くて基督教の心靈生活のうちに含まるゝところの一切のものについての豊かにして生氣潑洩たる感覺を築きあげ得るのです。實在へと奥深く入り込むことを普通の人々にも可能ならしめます。斯くの如き讀書は、もし正當に爲されるならば、眞に一種の祈禱であります。それは只に靈的修養と知識とを與へるのみでなくて、それよりも遙かに一層重要なるは、それがまた、懺悔へと導くこととあります。基督教の要求するところであり、そして極めて靜かに

又おだやかに、神の偉大なる獨創的な僕達によつて體驗されたところの、靈的完全と英雄的精神とに私どもがいよ／＼思ひをひそめるに従ひ、私ども自身の不完全について私どもの感念は不可避的に深まります。偉大なる積極的な基督教的諸徳——慈愛、忍耐、謙虛——の一つについての冥想へと最も善く接近する道は恐らく、第一に、その徳を、聖徒達の一人の生涯における英雄的行動において見ることです。そして此らの諸の徳について冥想することは、常に善いことです、何故といふに、私どもは、見るところのものに似てゆくといふのが、精神生活の法則であるからです。事實、私どもが最も善く成長するのは、私ども自身の難問題や短處に對する直接の苦心によつてではなくて、聖徒達の愛、歡喜および平和を凝視し、彼らの標準を受け容れ、その方へ私どもの意志と願望とを向けることです。これは讀書が私どもに與へる方向の一つであつて、私どもが讀書して、學んで自分のものとする冥想もしくは精神的新禱へと途を拓くものとして用ゐ得ると私が暗示したところのものであります。

さて冥想は、精神と靈魂とを、只に養ふのみでなくて、また訓練します。靈的事象に私どもの注意を堅く注めるやうに、私どもを徐々に訓練します。これは多くの業務に忙殺される人々にとつて、殊に困難です。これは放心を克服し、そして私どもの大部分の者らにとり靈魂が殆んど努力なしに神につける事柄を思ひめぐらす深遠な反省の状態に對する必須の序曲をつくるやうに私どもを助けます。それは一般的に、また正當に、秩序づけられたる敬虔生活における主要なる要素の一として見做されてゐます。想ふに、これを學ぶことを厭はぬ人々は、この慕はしき沈思冥想を心して行ひ、基督あるひは聖徒達の行爲と言葉、或ひは宗教の根本的な諸概念を、悟得し、思念し、穿鑿し、また個人的に適用することによつて餘程、その靈的食物を獲得します。この事を習得し、また實行する種々なる方法については、茲に述べる必要が不必要です。いづれも皆善く知られてをり、また屢書

き記されてゐます。その種々なる方法は、私どもの主要な心的性能を靈的目的に訓練する仕方において相互に似てゐて、視覺的想像、感情、思索、および意志を働かすべきことを要求し、また教へます。

然しながら、此らの形式的な又多岐的な瞑想を爲すことが如何しても自ら出來得ないのを見出す人々があります。斯く瞑想しようとする努力そのものが瞑想自身を無氣力にしてしまふ。この無氣力は、眞實なものであつて、假裝せる懶惰でない場合には、一般に、神との一層單純にして形式的ならざる靈交としての強い牽引と共存します。即ち何となく慕はしく神を念ずる思ひを伴ひます。これは時として「單純なるあこがれ」もしくは「感動的な祈禱」と稱せられ、また美しくも「何ごとも云はずして一切を表白し、何ごとも特示せずして一切を包容する祈禱」として記されたところのものであります。この傾向が顯著で不撓である人々は、この祈禱に惠念して、自力を棄て、そして自ら惹きつけられるのを感じる

靈的交通さして從順に進みゆくと私は思ひます。何故なれば、祈禱の世界において私どもの到達し得るものゝみが、人類に授けられた超自然的可能性の一細片を實現する特殊の道を示すものであること、また「超越者」に對する靈魂の交際を一の單なる體系もしくは形式に歸することは前もつて排斥せねばならぬといふことを、心得てゐるからであると私は思ひます。

一種特別な瞑想もしくは反省の状態を頑冥にも追求する努力は、常にそれ自身で潰え去ります。それは精進の法則を顛倒せるものであり、また瞑想の超自然的目的の代りに瞑想の努力に注意を集中することです。而も人々が、義務に對する誤れる感念よりして、彼の性質に決して適してをらず、或ひは既に脱却してしまつたところの方法によつて、信仰を發展せしめ、或ひは保存しようとして、無理に自らを強ゐるのを見るは稀でない。彼らは、沈黙の靈交に對する、未だ形にあらはれないが然し純眞なあこがれを、故意に斥けて、毎

日の形式的な冥想を行はうと苦心します。といふのは、これを彼らの生活の規範の一部に今までして来たからといふのです。或ひは無思慮に彼らが束縛されるに到つた執成の祈禱、また聲に出して獻げる祈禱、そして今や神に彼らの近づく自由を制限してゐるところの成文の祈禱を満遍なく行はうと苦心します。他方において、言葉にて表はし、また具體的な形象によつて支持されることを要する性質の人々が、或るつまらぬ書物に然かせよと書いてあつたといふので「沈黙に浸らう」として激しい努力をします。眞の沈黙の祈禱は力と美とに充つるものです。然しこのわざとらしい人爲的な受働的氣分ほど、結局愚なものはないと私は想ひます。斯くのごときからくりによつて私どもは靈魂を養ひ得ません。斯かるからくりの結果は靈的停滯をもたらすに過ぎません。更に、凡ての人は同一種類の食物によつて養育せられもせず、或ひは同一種類の靈的活動を爲すやうに神に命ぜられてもみません。當然、自然に變化があるやうに、それと併行して超自然的な生活にも變化があり

ます。重要なるは、成長の現在の段階において、今、何が各自を養ひ、また各自の靈を開発し且つ調和せしめるかを發見することです。

私どもを正しき態度に堅うし、私どもの靈魂を養ひ、私どもの地平線を擴大し、そして神の豊富と神秘とについての私どもの感念を深めるがために、密室の祈禱の時間を如何様に行ふべきかについて、少しく私どもは考へたのです。さて次に、祈禱に私どもを教育する道如何。これは私ども一人一人に切迫してゐる必要であつて、これより私どもはこの世にあつては完全に解除されることは決してないのです。茲に私どもは、宗教と心理學との交叉する論點に到らしめられます。肉體的生活に關する諸問題と必要とを解釋し、且つ物質的世界との接觸を確立するために要した精神的機構を、私どもの靈的生活と靈的接觸とに對して、用ゐねばならない。そしてこの精神的機構は、私どもが凡て知つてゐるやうに、往々反撥的であつて、これを調整することが困難であります。これは私どもの靈的願望と

信仰とに對して親密であるよりも、寧ろ、遙かに多く私どもの知覺的また動力的反動と親密な關係において存します。それは、外界よりの凡ての刺激に對して容易に反應する傾向を、久しき習慣によつて生ぜしめます。それは、自己に集注して、内的世界に永く心を留めることに——術語を用ゆれば、内省することに——先天的困難を有してゐます。私どもは皆、斯く内省するやうに、私ども自身を納得せしめねばなりません。而も斯くしても尚ほ、その訓練のこの方面は決して完全に果されたとは云へないのです。然しこの點については、これ以上に私は述べません。これは實踐躬行を志す凡ての基督教徒達の知り過ぎてゐる事實です。規則正しく行ふ祈禱の一大機能は、私どもの精神的機構を訓練し、敬虔なる生活において必要なるその任務を果さしむることに存します。

個人の内面的宗教の最も悲しむべき様相の一つは、敬虔なる信仰修養のために私どもが欲げ得る極めて制限された時間の多くを、私ども凡てが空費してゐることです。この空費

は、二つの主なる項目の下に分類され得ます、即ち放心と無感激とです。何人も此らの弱點より免れ得ませんが、如何しても私どもが努めねばならないのは、能ふ限り、此らの弱點を斥けることです。無感激については後ほど私は述べます。放心について云へば、それには、根本的および機械的とも稱し得べき二種類があります。根本的放心は、徹底的に注意力を缺如してゐることです。そして注意力の缺如は、眞に、興味の缺如です。私どもは、眞に、熱心銳意である場合に、放心状態に陥ることは先づありません。實のある處に、確かに心もあります。聖テレサが彼女の尼達に對して「最初に祈禱する場合には、誰かを伴へ」といつた勸告は、この根本的放心性の醫療に對する一の處方箋です。外部的心勞の壓迫を忘れることの不可能であるのを感じる人々にとつて特に適切であるもう一つの勸告は、その心勞そのものを、祈りの主要な題目とし、斯くて煩悶の代りに精神の傾倒によつて、放心を征服することです。他方において、機械的放心は、冥想と精神的祈禱とに限れ

る幻想の要素と關聯してゐると見えます。そしてこの型の思索において完全な精神集中を持續することの困難が固着してゐます。斯くの如き機械的放心においては、より深き靈魂は祈禱のうちにあつて依然として動かさず、意志と意向とは變動しない。そして却つて精神集中は、意識の領域を絶えず往來する無意識的思想と影像とによつて、攪亂せしめられるのです。これに對する救済策は、心意の忍耐深い訓練です。徐々に溝渠を形成し、それに沿うて私どもの敬虔なる信念の精力を注ぎゆくを得しめることです。

聲に出して祈る祈禱は、正しく行ふならば、この點において特に有益です。聲に出して祈る祈禱には、私どもの知つてゐるやうに、何ら神に對して告げ知らせまつるものがないが、然し私どもが神に接近し得る心的氣分を私どもに與へます。それは私どもの謂はゞ無線電信の度を合はす道です。斯く云ふは、聲に出して祈る祈禱が自己暗示であるといふのと同じと若し誰か抗言するものがあるならば、私は、斯かる祈禱の大部分が自己暗示であ

り、且つ更に、私どもは斯くして私どもの愚圖つきてさすらふ精神に、斯くの如き敬虔な諸觀念を暗示すべきであると答へます。それは神によつて私どもに與へられた一の方法です。それは宗教的な諸人物によつて常に用ゐられたものです。そして、行うて常に益を伴ふたものを、單に心理學がそれに新しい醜い名稱を與へたからと云つて、私どもは行ふことを恐れるべきではありません。形式的な祈禱は實際的の方策であつて、靈的必然事ではない。それは私どもの靈魂に直接な暗示を與へ、私どもが常に忘れ勝な實在を私どもに想ひ浮べしめます。それは差し迫れる問題に對して注意力を鑿はしめ、私どもの心的機構を捕捉して、これを靈的目的へと向けしめます。斯かることは單に、心理學の不敬虔な説ではありません。それはまた偉大なる祈りの人々の考へです。我々の願ひが神に聽かれんがために、我々は形式的な動作——たとへ純粹に内面的な種類の動作にもせよ——を爲すことは必要でない。そして若し我々にして祈禱において形式的な動作をすれば、それは

神に對してと云ふよりは、我々の注意を神の現前に置くやう、我々自身のためである。弱き我々は往々にして斯くの如き動作の援助を要する——然しそれは祈禱の本質に關るものでない」とグルウは云つてゐます。

もしこの原理にして理會されたらんには、聲に出して祈る祈禱は意味なく機械的な性質のものであると想像せられて或る人々を煩悶せしめる問題が、私どもを悩ますことがなかつたでしよう。この祈禱は正當に行はれんか、神の現臨といふ感念を絶えず抱くやうに徐徐に私どもを訓練します。この目的のために特に貴重なのは、既に私が言及したところの、簡単な動作的訓練です。此らの動作的訓練の多くは、その意味にして善く考へられた場合には、敬虔の寶石となり、不思議な力を發揮して、能く冥想の偉大なる世界を私どもに展開します。私どもの心意に、把握すべきものを與へ、これを鎮め、そして愛、忍耐、或ひは歡喜を暗示して、私どもにこれを感じしめます。さすらふ思ひを愛撫して、徐々に私ど

もの心的生命を訓練し、溝渠をつくつて、いよく益々この生命を馳せゆかしめます。斯くのごとき習慣は、型られた場合には——そして型られるには時間を要しますが——多忙なる傳道者達にとつて、安心と平安との盡きざる源泉であります。

これ以上に更に進んで私は、ヂエムス・ラングの規範として知られてゐるものが敬虔の生活に直接の關係を有することを云ひたく思ひます。即ち、私どもの感情は、適當な舉措と、また感情と關連せしめられた筋力的運動と、極めて密接に結合し、また往々此らの二つのものによつて惹起されさへするのです。斯くて例へば、膝まづくことは私どもをして祈る氣分に置くやうに傾けしめます。その他常識に富む人々が餘りにも易々と斥け去るところの多くの一層凝つた儀式的な動作的訓練は、同じ意味において、心理學的に是認されます。かの直覺的な心理學者聖イグナティウスは、何ものをも偶然に歸することをしなす人物であつたが、靈的訓練を徹底的に爲す者らの身體的舉措に對して、極めて入念にして

厳密な指圖を與へてゐます。例へば、冥想を始むるに先立ち、冥想のなさるべき場所より數歩前のところに退いて直立し、自ら氣を落ち付け、おのが心意を神にむかつて擧げ、そして今爲さうとしてゐることに現に心を注めたまふものとして基督を考へることを勧めてゐます。この靜止は、主の祈を唱へるほどの間があるべきであるが、それが終つて、前に進み、そして「所期の目的に最も適はしい態度を探る」べきであるといふのです。斯くいへば、如何にも甚しく人爲的に聞えるかもしれないが、然し何人でもこれを一週間試みる者は、結局、聖イグナティウスは如何にして人間を制御すべきかを大いに知つてゐたといふことを認めるでしょう。私どもは、私どもが尙も半ば獸であつて、私どもの修練を私どもの状態に適はしからしめねばならぬといふ事實を認めて謙遜になるにあらざれば、決して靈的にはならないでしょう。

最後に、凡ての進んだ祈禱の生活に必ず現存する一の要因について少しく私は語りたく

思ひます。即ちそれは、靈的無感興と冷淡とに傾き易いことでもあります。これは凡ての熱烈な基督教徒にとつて痛ましいことですが、然し人々の靈魂のうちに働くことを職務とする人々にとつては特に悲しむべきことです。實在に對する私どもの興味と感念とが一切蒸發してしまつてゐる時、宗教に關する言語が意味なきものとなり、そしてそれは即ち眞の意味において、祈ることが全く出來なくなつた時です。凡ての人々は絶えず色褪せてゆきます。そして斯くの如き状態の下にあつて、如何に最も善く神と他の人々の靈魂とに奉仕し得るかを知ることが、傳道者および宗教家の大問題の一つです。ところで先づ第一に、斯くの如き信仰の蒸發の甚しさを減ずることが出来るのであるが、それは傳道者が自身を賢明に處理することによつてであります。そしてこの自己に對する處理は明白に傳道者自身の義務であることは、恩寵も常識も一致して示します。この問題は主として心理學的な事柄です。それは疲勞の状態です。それは時としては、極度の敬虔的熱誠に對する反動

であり、時としては、靈魂の内的貯蔵を消盡してしまつた過激な靈的活動に對する反動です。この状態は、凡そ顯著な靈的進歩もしくは啓發のあつた時期の後に、殆んど必ず伴ひ來ます。いづれの場合にもせよ、第一に肝要な事は、この状態を靜かに受容することです。これを激發せず、また焦慮せず、これに拘泥せず、氣に病んではならないのです。寧ろ、能ふ限り、或る俗務もしくは慰樂に心を轉じて、「雲の過ぎ去るまで待ち望む」べきです。多くの傳道者達は、凡ての日曜日の終りには、疲勞し切つた状態となつて、自分自身の祈禱をさへ云へなくなりませす。斯くの如き場合には、傳道者達の一人が云つたやうに、傳道者が欲し得る唯一の靈の賜物は、暖い入浴です。これは傳道者の限りある心的肉體的精力が收斂すべき謂はゞ渡船賃です。斯かる場合に、徒らに、努力し、逆ふことは、たゞ事態をますます悪しくするばかりです。

然しそれは、獻物と化せられ得る渡船賃です。宗教家の生活の最も苦しい職責の一つは、

自身が信仰の荒廢のうちにある際に、他の人々の靈魂を助けるために屢招致されることです。斯かる場合には、斷乎としてその務に任じ、人々の歡喜と絶望とに傾聴し、遠慮するところなく、身を投げだして彼らに奉仕し、決して自己の内的生活の状態を少しも洩らすべきではない。そしてこれは、傳道者の有する一切の經驗のうち、最も潔める力を有する經驗です、何となれば、それは、自己満足をもたらず要素を絶對的に含みせず、却つて傳道者をして完全に神に引き歸らすからです。傳道者の敬虔なる生活がその尊さを示すのは、何よりも、無感激と荒廢との時に爲される働きにおいてであると私は考へます。

第三 講

衷なる生活の本質的性質を考慮する際に、本文として掲げた聖イグナティウスの言葉に

「人間はその神たる主を讚美し、敬ひ、またこれに奉仕するために創造せられた」とあります。これは元來本性に反するものに成らうと試みるのでもなく、或ひは及びもつかぬ望みを叶はさせようと努力するのでもなくて、いまこの處に、手段が與へられてゐるこの人類の運命を完全に遂行しようとすることです。

もし私どもにしてこれを爲すことを既に始めたすれば、もし神に對する畏懼と恭敬、神の臨在に對する畏れかしく喜悅が、實に私どもの内の生活を支配し、そして靈的人格の發展を私どものうちに促しつゝあるならば、即ち確かに、その結果は、或る形式の靈的奉仕として現れるに相違ない。多かれ少かれ、人間は生れながらにして靈的であり、そして既に靈の創造的特質を幾分か所有してゐるが故に、喜悅と畏懼とは行爲のうちに表現されねばならない。それは即ち靈の手によつて成就されたる靈的行爲です。人間の超自然的な生活が展開するにつれて、その超自然的効果も増大するに相違ないのです。この事が私ども

もをして、健全なる祈禱の生活の四つの意義の最後のものに到らしめます。それは人間の靈魂を渴仰のうちに持續せしめ、これを養ひ育て、その諸機能を教育します、そして創造的行爲を爲さしめるに相違ありません。

宗教的な人々が本能的に靈的行爲に附する第一の明白な意味は、無論、執成といふことです。然し靈的行爲は、通常私どもが意味する執成といふことよりも遙かに廣い範圍に亘り得ます——そして確かに、傳道者達の場合においては、亘るべきです。靈的生活の健全な發展は、次の二つの動向、即ち第一に神に向かふところの、次に他の人々に對する靈魂の愛と精力との方向の間に平衡を保つことに據ると私どもは云ひました。このうち最初の動向たるべき、神に向かふ動向の諸特質について特に私どもは論じました。即ちそれに必要な全心的歸依と信頼、次に、この靈交を養ひ育て、深め、堅うすること、そしてこれに對する、またこれに據れる靈魂の教育について論じました。一言にして云へば、人間

の超自然的(超自然)生活(生活)の性質(性質)と涵養(涵養)とについて論(論)じました。凡(凡)てこの過程(過程)の窮極(窮極)の目的(目的)は何(何)であるか、確(確)かに、それは單(單)なる靈(靈)的自己(自己)陶冶(陶冶)ではありません。斯(斯)かる考(考)へは、如何(如何)なる靈(靈)魂(魂)にとつても怕(怕)るべきものであるが、特(特)に宗(宗)教(教)家(家)にとつては然(然)うです。目的(目的)は靈(靈)魂(魂)を、神(神)に向(向)つて、一(一)層(層)創(創)造(造)的(的)にし、一(一)層(層)有(有)力(力)にし、一(一)層(層)有(有)用(用)なものにし、靈(靈)魂(魂)のうちに靈(靈)的(的)精(精)力(力)、純(純)真(真)にして豊(豊)富(富)なる品(品)性(性)を増(増)大(大)せしめることにのみ存(存)すべきです。實(實)際(際)、靈(靈)魂(魂)をして、一(一)切(切)の獻(獻)身(身)的(的)活(活)動(動)、即(即)ち單(單)に肉(肉)體(體)と心(心)意(意)との活(活)動(動)のみでなく、信(信)者(者)達(達)の牧(牧)者(者)たるものに缺(缺)くべからざる靈(靈)的(的)活(活)動(動)をも、い(い)よ(よ)く爲(爲)し得(得)るものたらしめることに存(存)します。冥(冥)想(想)家(家)達(達)のうち最(最)大(大)なるもの一人(一人)であつた聖(聖)テレサ(サ)が、靈(靈)的(的)結(結)婚(婚)——この言(言)葉(葉)は、彼(彼)女(女)において、一(一)の情(情)慾(慾)的(的)恍(恍)惚(惚)を意(意)味(味)せずして、人(人)心(心)を一(一)變(變)せしめるところの、靈(靈)魂(魂)と神(神)との完(完)全(全)なる創(創)造(造)的(的)結(結)合(合)を意(意)味(味)します——の一(一)の真(真)の目(目)的(的)は、全(全)く、行(行)爲(爲)の産(産)出(出)にあると主張(主張)してゐます。ルイスブレツクの「十二(十二)人のペグ・オン」のうちに驚(驚)くべき一(一)章(章)があつて、そのうちに

彼は、この状態(状態)に到達(到達)し得(得)た或(或)る人(人)の生(生)涯(涯)を叙(叙)して「愛(愛)と憐(憐)憫(憫)とをもつて外(外)的(的)世界(世界)に奉(奉)仕(仕)し、而(而)も内(内)的(的)には、單(單)純(純)と靜(靜)寂(寂)と、全(全)然(然)の平(平)安(安)とのうちに常(常)住(住)する」ものとなしてゐます。これを讀(讀)んで私(私)どもは、この最(最)大(大)の神(神)秘(秘)家(家)ルイスブレツク自(自)身(身)に對(對)して傳(傳)へられてゐることを想(想)起(起)します、即(即)ち或(或)る教(教)區(區)に三(三)年(年)間(間)彼(彼)は牧(牧)師(師)であつたが、その三(三)年(年)間(間)「心(心)を絶(絶)えず神(神)にまで高(高)く持(持)しつゝ」市(市)街(街)を往(往)來(來)したといふのです。彼(彼)は愛(愛)と憐(憐)憫(憫)とを抱(抱)いて外(外)的(的)世(世)界(界)に奉(奉)仕(仕)傳(傳)道(道)したのでした。然(然)るに内(内)的(的)には單(單)純(純)、寂(寂)靜(靜)、および全(全)然(然)の平(平)安(安)のうちに常(常)住(住)してゐたのです。斯(斯)くて活(活)動(動)、努(努)力(力)、および緊(緊)張(張)は、斯(斯)くの如(如)き靈(靈)的(的)創(創)造(造)の生(生)活(活)の外(外)的(的)表(表)現(現)であり、本(本)體(體)です、而(而)も全(全)くこれ(こ)れは、單(單)純(純)、靜(靜)寂(寂)、および平(平)安(安)のうちに於(於)ける内(内)的(的)常(常)住(住)に據(據)るものであり、且(且)つ又(又)これ(こ)れに據(據)つて養(養)ひ育(育)てられるものです。私(私)どもの使(使)命(命)は「永(永)遠(遠)なるもの」と「不(不)變(變)なるもの」とに、日(日)毎(毎)に秘(秘)かに參(參)向(向)し、これを擬(擬)念(念)することによつて、これを私(私)どもの變(變)轉(轉)極(極)りなき現(現)實(實)生(生)活(活)の凡(凡)ゆる部(部)分(分)に亘(亘)つて、身(身)に帶(帶)びることです。この

慕はしい、貴い修業を積み、漸次これを我がものとなすことによつて、私どもは、實に現世の生活の實質そのものを、いよ／＼一變し、且つ神々しくするのではないでしようか。斯くして、ます／＼人間の靈魂の特別の使命を果し、靈の世界と感覺の世界との間の一の連鎖となるのではないでしようか。

もし私どもにして斯くの如き生活を送らうと志し、宇宙の神的活動と斯くの如くに結合するならば、それと殆んど同時に私どもは、超自然的精力が單に私どものうへに働くのみでなく、私どもを通して働くことを見出します。他の人々との私どもの接觸は前よりは遠つたものとなります。私どもの靈魂が彼らの靈に接觸して、往々、無意識のうちに、これを一變せしめます。私どもは、私ども自身の祈禱において受けた超自然的力を、私ども自身がいよ／＼多く用ひ、展解し、且つこれを分け與へ得るのを見出します。そしてこれは、大抵の場合、極めて單純にして非計畫的な道によつて、達し得られます。この力は自ら、

傳道者達のうちにあらはれて、傳道者達に委ねられた諸の靈魂の有する要求と特質とに對する覺醒せしめられた感念となり、また罪惡に對する抗爭となつて、單に表面にあらはれた罪惡の行爲のみでなくて、罪惡の根源そのものと戦はしめます。この戦ひがまた傳道者達の任務であります。この事は實に、傳道者達にとつて特別に重大なることです。そしてこの域に到達せんことをいよ／＼願ふことは、渴仰の生活が傳道者達の靈魂に深まるにつれて、避くべからざることです。渴仰の生活の結果は、必ず、いよ／＼擴まりゆく精力的自己献身のおよび贖罪的愛です。

さて執成は、祈禱の雰囲気の中に働き且つ奉仕するたぐひの愛です、そしてそれによつて私どもは、他の人々の靈魂に透徹しまた影響を及ぼします。私どもが斯くの如く爲さねばならぬといふことは、靈的生活の神秘的な天則のうちに定められてゐると見えます。それは神の聖靈が私どもに降り、働き、また人々や諸事件を通して、秘かに靈魂のうち

に、また外部的に、私どもを型り、且つ導きたまふ道を、私どもの弱小ながら成長する靈が微弱ながらも學び倣ふことです。今までに私どもの知れる最大なる人格が私どもを驅つて實在を感得せしめたことを考へるならば、また私どもにしてこれを高い度合にまで増大するならば、それは人間を通して他の人間に働きたまふ永遠にして活ける「靈」の強くして奇しきことについて、また私どもがこれを爲さうとする充分な愛、勇氣、および謙虚を有するならば、莫大なる超自然的活動が私どもを待つてゐることについての暗示を、私どもにも與へます。私どもの上に負はされてゐる職責についての斯くの如き見解は、私どもに先立ちて、神が私どものために圖りたまふといふ宗教的眞理に中心を置きます。自然的手段によつて人々を追ひ求めたまふが、就中、人格を通して自らを啓示したまふ超自然的神といふ宗教的眞理に中心を置きます。茲をもつて、何よりも第一に、斯く神のために、また共に働かうと努力することにおいて、靈魂は生長します。そして靈魂は、成長するにつ

れて、いよ／＼斯くの如き活動を爲さうと欲します。ペテロに對する「わが羊を牧へ」との命令は、正しく羊に對すると同様にペテロに對して有益であつたのです。聖徒達は、私どもにとり、渴仰と執成とのこの二重の生活の大なる模範です。即ち熱心にして、爲にするところなき愛の極みであつて、而も現世に「永遠の靈」を擴充し、且つ受肉せしめようと努むる完全にして均衡を得てゐる基督教の範例です。

斯く云へば、靈的活動は如何にも超自然的なものに聞え、普通の基督教徒の企及すべからざる度合の力と聖潔とを必要とするかのやうに見えます。然し聖テレサは、要點をつかむ顯著な直観によつて指摘して、斯くの如き活動を行ふを得しめる神との結合の保證は、何ら崇高な若しくは異常な種類の經驗のうちに見出さるべきでないといつてゐます。それは、就中、いよ／＼深まりゆく個人的謙虚、隣人達に對する一層活潑な愛と、そして日常の業務の神聖なること——謂はゞ私どもの毎日の雑務に神的完全を實現することを益々鋭

く感ずる精神との結合のうちに、見出さるべきであつたのです。此らの三つの特質は、第一に、私どもが被造の身分であるといふ感念と、平安の唯一の源泉であるところの柔和にして嬰兒のごとき依憑感とを含み、次に、人生の凡ゆる關係を快適ならしめ、そして「愛らしからぬものを愛して愛すべきものたらしめる」ところの完全にして偏るところなき慈愛を含み、最後に宗教的および世俗的の、日常の全課程を一の靈的活動に一變せしめるところの、徹底的な献身、完全な奉仕の行爲における欣然たる歡喜を含みます。以上三つの特質を有するがために必要なのは、日の輝く時にも、霧にとざさるる時にも、私どもの業務を靜かに果すことであつて、これは感情とは異なる寛裕な精神であつて、聖献の生涯の脊骨となるものです。聖テレサのこの鑑別は、凡そ祈禱の生活は、外容と内部とのこの完全なる一致となつて現るゝにあらざれば、その機能を正しく果してゐるとは云へず、また人間の靈魂の使命である任務を我々が充分に爲し遂げつゝあるとは云へない——即ち我々は

中途で止まつてゐるのであると云ふことを意味する。

これは畢竟、充分なる基督教的生活の第一の關心事は「存在」の領域に關し、神自身に關するものであつて、盡きることなき外的行爲と經驗との連鎖のうちにおいて私ども凡ては神に關係づけられねばならぬといふことを意味するものに他ならないのです。また第二の關心事は、この「存在」の世界の諸價値を「生成」の世界、即ち繼起と變化との物質的世界に具現せしめることです。斯くいふは、勿論、問題を大まかに哲學的に語つたものです。これを一層宗教的に云へば、斯くの如き生活の様式は、基督の贖罪的および啓明的の二重の業績を、私ども自身に許容されたる小規模において、遂行するといふことになりま

す。そしてこれを如何にも自發的でまた徹底的な歸依愛、謙虚および精勵によつて爲すが故に、私どもは、現在において「永遠なる者」のエチエントとなるのです。再言すれば、私ども自身の修練において創造的なる内的生活を眞に發展せしめるならば、私どもは、

それは二重の活動——神および他の人々の靈魂に對する活動——に向けしめられることが期して待つべきであるといふことを意味します。

斯くて基督教の傳道者達の完全なる生活は、譬喩的意味以上において、不斷の祈禱の生活であり且つあらねばならないのです。それは神の雰囲気における不斷の内の常住、神の繼續的刺衝に對する逡巡せざる響應、神の創造的意志とのいよ／＼完全なる結合さしての確乎たる接近を要求します。この状態を保持する私どもの能力の増進によつて、深さと、力と現實性における私どもの靈魂の増加を査定し得るのです。協同的の、若しくは密室における成文の祈禱は、單にこの生活の骨格に過ぎない、そして主として、私どもを整調して、この生活に教育するためのものです。神に對して爲されたる凡ゆる仕事は、また神に直接に關係づけられる生活の凡ゆる行爲は、祈禱であり得るといふことは、無論常に、基督教的見解であつたのです。願望を感覺的なものうちに、またこれに據つて、超感覺

的なものゝ心核にまで導向することは、聖禮典的生活の中心的奧義に肉迫することです。然し内のおよび外的兩方面のこの完全な調和は、靈的圓熟の特權であり、そして靈魂の直接な靈交、伸展、および激勵を促進し且つ深めるために、毎日一定の時間を裂かない者は、到底斯かる域に到達し得ないのです。

そこで特別な境遇に置かれてゐる傳道者達は、如何にして、祈禱と外的行爲とを、使徒的生活の單一な完全な構造にまで組み立てようとしつゝあるか。傳道者達がこの域に達し得ると私に見える多くの手段のうち三つだけを茲に私は挙げます。それは彼らの祈禱の内の生活をして、祈られる人々にとつて絶えず、また直接に、有益たらしめ、祈禱に牧會的活動を伴はしめるところのものです。

私は第一に、極めて單純な一つのことを述べます。それは、殆んど萬人が爲し得ることであると私は想ひます。また無効に終つたのを私が決して見たことのないものです。それ

は即ちこれです。傳道者達は自分の教會堂において、能ふ限り、時間をつくつて祈禱することです。これぞ、此らの教會堂をして眞に意義ある祈禱の家、學校、家庭たらしめる第一の動力です。教會堂が然うでないことが餘りにも屢です。斯く云へばとて私は、單に成文の朝禱や晩禱を教會堂にて行へといふのではありません。私の眞意は、神との現實的な、形式張らない交りのための時間の少くとも一部分を、教會堂内にて過ごせといふのです。これは、私どもの教會堂に敬虔の雰圍氣を漲らしめる最善の、また最も確實な、道です。この敬虔の雰圍氣は、あれば直ちに私どもは皆それを識つて、教會堂を靈的の家たらしめるところのもので、またこれは、現時において私どもの發揮し得る基督教的顯證の最も價値あるものゝ一つであると私は信じます。

教會堂にして、若しその傳道者達が敢てそこへ行き、そしてそこで祈らうとしないのであれば、教會堂の扉を開いて置くのは、全く無用であると私に思はれます。教會堂の靜謐

な雰圍氣を大いに必要とする勞働者達が、眼立たずに入り込み得る時刻にあたつて、もし出来るならば、彼らを歓迎すると云つた氣分を教會堂に漂はしめることが、確かに傳道者達の任務の一つです。大抵は、自分自身の時間とか、自分自身の生活とかいふもの知らずに、騒々しい市街のうちに生活してゐる此らの勞働者達に對して、祈禱の意義と必要とについて、漫然として語ることは、彼らに祈り得る靜かなる處を與へない限り、無益です。週日を通じて英國教會の多くの會堂に特有な、塵除の白布にて蔽れてゐる靈的待合室といふぎこちない空氣を湛へて彼らを迎へる場處で教會はあつてはならないのです。それは、適切な暗示に充ち、彼らの心を惹きつけて、これを受けしめるものでなくてはなりません。それは眞に、私ども自身の祈禱によつて、この必要なる慕はしい感じが大いに起される場處であらねばなりません。斯く眞の超自然的な力の充つる家庭を創造すること、また眞に超自然的な力に充つる歡待を確實に實現すること、この事が傳道者が自己の内の生活によ

つて人々に奉仕し得る第一の點であると私に思はれます。

傳道者が祈禱による自身の自己修練をして人々のために有用ならしめ得る第二の道は、一般的に執成と稱せられるところのものであります。これは、云ふまでもなく、私どもが人々のために爲す愛の冥想と祈禱とによつて、援助をなし、精神的肉體的兩方面の疾病患難の醫德的救助に盡力し、信仰上の指導を爲して、教區に對し、また個人々々のために盡し得る一切のことを包含します。人々の靈魂のために盡す者らは、人生の表面の下に動いてゐる不思議なる靈的潮流について、また愛が超自然的水準において超自然的な目的のために働き得る廣汎さについて、幾分か直ちに知るに到ります。然し私どもにしてこの域に到達せねばならぬとすれば、須要である一つのことは、この事について一生懸命に心に向けることです。まことに、これが爲には如何ばかりの苦痛をも意としないといふ程に、心に向けることです。私どもは、自ら心に向けて一生懸命にならぬ限り、他の何人をも援助し得ませ

ん。何故なれば、靈が靈に透徹するのは、たゞ愛によつてのみであるからです。

執成のこの驚くべき神秘のうちに含まるる意味について、少くともそれに就て私どもの理解し得る限りにおいて、暫時考へしめよ。それは、第一に、私ども凡てをつむ大洋のやうに、限りなく愛し、活き、そして普く遍滿したまふ靈の靈にまします神を、私どもが悟得することを意味します。その次には、人間の思辨が束縛される空間的な言葉を尙も用ゐて云へば、この統一し活氣づける媒介によつて私どももまた、愛と意志とにおいて神と一つとなり、未だ判明しない道によつて私ども人間相互の靈魂に、交互に透徹し、これを動かし影響し合ひ得るといふことです。而もこの全過程を通じて私どもは、これに先んじたまふ、人格的にして自由な遍在の神によつて、型られ、また決定されてゐるのです。神が創造したまふた、また創造し給ひつゝある世界は、「靈」にて限なく滲透されてゐます。そしてこの世界の靈的な仕事の爲されるのは、一部分、人々の祈り深き且つ神に靈感された

行爲に據るのです。祈り深き男子もしくは女子が、専念の祈禱によつて、誘惑にある靈魂に到達し、これを助ける場合、私どもは此をもつて、この人間を器として用ゐたまふ神自身行爲であることを、確かに承認せねばなりません。

精力のこの神秘的相互作用において、一つの「道具」が私どもの手に與へられてゐるやうに見えます。即ちそれは私どもの愛、意志、興味、願望です。四つの言葉は一つのことの四方面を述べたものです。この動的な愛は、一たび利己心を淨化されると、靈的水準において用ゐる私どもの力となります。それは他の人々の靈魂に對して、神と共に働く一の機關です。聖徒達は、斯くこれを、往々、非常な犠牲を拂つて、そして非常に力づく、用ゐたのです。彼らの人格が力において成長し、そして渴仰において擴充されてゆくにつれて、いよいよ彼らは他の人々の靈魂に對する決死的且つ英雄的格闘へと惹きつけられたのです。斷乎として寛裕に、人々に援助を與へ、人々の靈魂を呼びかへして神と共に働か

しめる贖罪的祈禱といふ、徹底的にして創造的な諸活動へと惹きつけられたのです。殊に、その極めて神秘的な洞察、苦難と罪惡とに對するその贖罪的、自己悔恨的行爲において、彼らの執成は、基督の超自然的功業を騰ろげながら再現し、また繼續します。眞の聖徒達は、世界の諸の罪惡と苦痛との重さを身に感じ且つこれを負ひます。斯く私どもが相互に代贖的苦難を受け得ることは——そして彼らは受けたのです——人間の靈魂の最大の特權です。

「神は我をして祈禱のうちに苦惱するを得しめたまへり」と聖徒的な福音傳道者デビッド・ブレイナードは云つてゐます。「わが靈魂は世界にむかひて甚しく引き出されたり。われは群がる靈魂を把握しようとなつたり。これは深い神秘的な精力について、未だ到達されなかつた可能性があるといふことを私どもに感ぜしめないでしようか。通常「執成」と稱せられてゐるところのものうちに包括されない或るものが茲にないでしようか。聖テレサ

もまた、凡て若し神に結合してゐると主張する者にして常に平安な祝福の状態にあるとすれば、それは實際神と結合してゐるのであるとは到底信じないと云つてゐます。神との眞の結合は、彼女の考へにとつては、世界の罪惡と苦痛とに對する大なる悲哀を含むものです。只に神との一致の感念のみでなくて、凡そ他の人々の靈魂との一致の感念および此を贖ひ且つ癒やさんとの大なる憧憬を含むものです。それは眞の超自然的愛です。それは善き人々のみでなく、穢らはしき人々をも、好ましき人々のみでなくて、好ましからぬ人々、頑冥、褊狹また怨恨を抱く人々、また更に遙かに厭はしくある愚鈍な人々をも、愛し且つ救へとの召命です。價値や意見や、個人的嗜好に關らずに愛することです。私どもの氣持にそぐはぬ人々をすら愛することです。もし斯くの如くに人々を愛して、當然、愛を不斷の執成の務に實現し、そしてこの苦難、罪惡、窮乏の大洋に陥没することを避けねばならぬとすれば、それはまた、渴仰の氣分と信賴の歸依の心とを保持し且つ涵養することによつ

てのみ可能です。これぞ祈禱の生活の中心です。そして中心よりして働く限りにおいてのみ、私どもは、他の人々の靈魂に接觸し、これに感化を與へるやう企及し得るのです。何故なれば、斯くの如き執成は一の犠牲的仕事であり、そして犠牲的仕事は、爲し遂げられんがためには、深い内的生活の支持を要するからです。それは愛のうちに根ざし且つ基礎づけられてゐます。

私どもの祈禱の生活が信者達のうへに反應する第三の明らかな道は、教訓を聞きに来る人々に與へ得る個人的勸告を指導——専門的術語を用ひて云へば、指導の任務のうちにあります。指導とは何であるか。それは或る靈魂が他の或る靈魂によつて指導されることです。それは教會的任務の個人的な實質的な方面です。神は非常に、個々人に、他の個々人によつて來り、また影響を及ぼし給ひます。そして傳道者たるものはその按手式の時に、この任務として生涯を全然獻げたのであります。弟子として修練する道は、靈的生命の凡

ゆる段階を正しく踏みゆくことです。これに社會的意義を與へて、主觀主義や放縱に流れることより防禦し、その持久性を確實ならしめることを要します。茲をもつて私どもは、與へられたもの、また獲得したものの、凡てを、常に他の人々に傾かたうと心がけてゐるのです。

斯くの如き指導の任務は、確かに、人間の諸義務中最も神聖なものゝ一つであり、また内的生活がいよゝ強くなり且つ靈的敏感性が増大するにつれて、それを求めて、ますます人々の靈魂は寄せ來り、また愈々その困難さと可能性とが明らかにされるでしょう。この故に、嚴かなる責任が傳道者に負はされてゐるではありませんか。即ちこの任務のために自己の心意並びに靈魂を修練することです。例へば、人間の心意の諸の特殊の性質、殊にその宗教的生活に影響を及ぼすものについて相當に學ぶこと心靈的生活の種々なる段階と類型とを認識し、これに處する最善の道を見出すこと、諸の靈を辨へ、その異なる傾向

と缺陷とを識別すること、これです。斯くの如き識別に熟達することは特別の天賦に據るべきであるが、然し、私どもにして人々の靈魂に相當の興味を抱く限り、或る程度までは、これは私ども凡てに可能です。指導の任務は、勿論、神に對する絶對的の内的依存によつてのみ可能であり、また必ず可能です。そしてその最も尊い部分は、全く、傳道者が召されて指導すべき人々の靈魂に對する傳道者自身の祈禱の感化によつて、沈黙のうちに爲されます。人々の靈魂に接近して、これを斯くのごとき風に型ることが完全に可能であり、實行し得べきことであるのを見出すでしょう。そして人々の靈魂にして結局無感覺なものでないとするれば、そのことを傳道者が努めてゐることを、恐らくは氣づくでしょう。

靈的勸告をうけんために傳道者のもとに來ようとする人々のうちに、三つの目立つ階級があります。第一は、まだ若い人々で、信徒按手式の志願者達もその中に含まるが、靈的、心意的、および情感的生活の門途にあつて、宗教上に指導者を欲する者らです。第二は、

信仰を失へる、或ひは嘗て信仰を有したことがなかつたが、今神を識るために援助を求め
る壯年者達です。第三は、依然として基督教徒ではあるが、疑惑に悩まされ、或ひは人生
の試練を受け過ぎてをりながらも、神を見失はざらんがために援助を求める壯年者達で
す。さてこの點について第一に心懸くべき原則は、確かに、此らの各階級の各個人に、別
別に、對應せねばならぬといふことです。また凡ゆる場合において、指導する靈魂は、第
一に、自分自身の意見や、何らかの型にはまつてゐる信條や、「カトリック」もしくは「福音
的」主義などについて考へずに、その特殊の必要に迫られ、發展の特殊の段階にあつて、
また神との特殊の關係にあつて、求導しつゝある靈魂のことを思はねばなりません。

傳道者達は、活ける、生長しつゝある、個々の靈に面接してゐるのです。それは基督教
的封印を印銘さへすればいゝと云つた蠟の一塊ではないのです、そして私どもが神に對し
て責任を負ふべきは、多分理解されないであらうところの正統的信條の若干を靈魂に與へ

ることではなく、靈魂を助けてその現状を知り、その特殊の靈的能力を會得し、斯くして漸
次一層多く現實的力を有するものとなり、その潜在的天賦を發揮して、聖潔の域に達せし
めることに存します。茲をもつて指導者が如何なる代價をでも拂つて克服すべき最初の誘
惑は、傳來の諸概念を一般化して、これを適用することです。若くして、試練を経ない者
らに對してすらも、型にはまつた指導と方法とは往々にして、有害です。何故なれば、既
に、そもぐの始まりからして、靈魂は相互に非常に異つてゐるからです。凡ゆる類型と、
氣質とに對する大なる尊敬、つゞましき忍耐、謙虚な自己没却、眞の靈的成長の遅いもの
であるとの感念、此らは、善き指導者をつくる特質です。教師は往々にして熱烈なる者と
歩調を無理に合はさしめようとします。然るに指導における聰明なる調整、柔和に忍んで
待つ心は、恐らく、凡ゆる場合に萬人にとつて常に安全なものであります。

第二および第三の種類に屬する靈魂の人々に對しては、勿論、自己を没却して、徐々に、

氣を配りつゝ進むことが、一層必要です。何故なれば、この場合においては、多かれ少かれ上達したる、然し煩悶せる人々に對してゐるからです。彼らは、空疎なことには、敏活に氣づき、神學的な形式論に感づき、そして凡て傳道者のいふところのことを、批判なしには受け容れることを恐らくしないでしよう。然かのみならず、傳道者は、彼らの心意の能力と見解とはに必然にたゞ一部分しか通じ得ないのであるが故に、自分の言葉が正確に如何なる意味を傳へ、また如何なる結果をもたらすべきかを、決して確知し得ないので。宗教的な諸概念を圍繞せる情感的雰圍氣は、就中、極めて理解し難いものです。傳道者自身の歸依せる信仰上の諸表象も、結局、求道者達を逐ひ斥ける極めて念の入つたものとなるやうなこともあるのです。斯かる場合に處するには、絶えず神に憑依するほかないのです。斯くのごとき場合に處する唯一の希望は、結局、祈禱の靈のうち存するのです。眞に重要なのは、私ども自身の確信の謂はゞ傳染的性質であつて、決してその表現である議

論ではないといふことを、絶えず記憶することです。斯く爲すならば、私どもの仕事の結果は往々にして私ども自身を驚かすでしよう、そして傳道は、私どもの語る言葉に然う大した關係がないやうに思はれるでしよう。

極めて感銘を受け易く、また私どもに對して極めて同情的であり或るひは然う見える人々に對する場合でさへも、私ども自身の有する靈的角度と正密に同じ角度よりして、實在を、他の靈魂に認めしめることは斷じて出來ないといふことを承知し居ることは有益です。傳道者は、到底、自分の確信の最も根本的なものすらも、色彩もしくは意味を變へることなしに、彼らに傳へ得ないので。また傳へようと欲すべきではない。何故なれば、その色彩もしくは高調の大部分は、私ども自身の寄與であつて、絶對的眞理とは關與するところがないからです。求道者達は、その神に對する態度に於て、私ども自身のそれとは全然異なる心的内容をもつてするのは、止むを得ないことです。茲をもつて、心理學的用語

にて云へば、彼らの統覺的總積は彼ら自身に特殊のものであつて、彼らの教育、趣味、性格、過去の經歷、および社會的實境によつて、彩られたものです。さて統覺は、凡て私どもの宗教的洞察と經驗とを統御します。それは、私どもが肉體のうちに存する限り、如何にしても、純粹たり得ないものです。この心理學的法則の結果、私どもの極めて入念な、また精密な教導も、往々にして受容されずに終ることがあり、然らざれば、その結果は不明なものと見えます。この事は、もし傳道者にしてその語る特殊の言葉に絶對的價値を置くならば、極めて意氣沮喪せしめる經驗となり、また職務上の自信を甚しく失はしめてしまふのです。

然し祈禱の内の生活が深まり、練られ、そして没我的になるにつれて、また内的に認識された實證を蔽ふものとしてのみ、形式を尊重するやうになるにつれて、私どもは、今や實に痛ましく多くの人々を撃退してゐるところの常套的辭句より脱却して、おの／＼の靈

魂の特殊の事情に、私ども自身の言葉を適合せしめ得ます。諸福音書の一の顯著なる特色は、私どもの主が同一のことを如何に多くの異なる様式において語りたまふかを私どもに明らかにしてゐる點です。即ち如何に主が様々の種類の人々に、その人々の立場において、對應し、そして或る者には、百合花を思ひ見ることによつて天父を識るやうに求め、而も他のものには自己克服と十字架とを要求したまふたかを明らかにしてゐます。そして窮極において如何ばかり困難で高き犠牲を要求するものであるとしても、極めて聖徒的な教師達が人々を導くその方法において、常に極めて變化があり、諄々と説き、峻酷でなく、また説得であるといふことは、依然として事實です。

これは、凡て斯くの如き活動を、眞に牧者的角度より見ることを意味します。眼を斷乎として個々の信者達の氣質、種類、渴望、およびその將來の發展に向けること、また傳道者自身の完成ではなく、彼らの性質にあてはまる種類の完成を實現するために援助しよう

と努めること、また「型にはめよう」とする誘惑を斥けて、絶えず生命を目標し、各の靈魂にいよ／＼豊かなる生命を與へて、これを養ひ育てんとすることを意味します。單に知識を與へるのみではなくて、消化し得る、また消化されるに相違なき適當な食物を供給し、且つ變化があらねばならぬこと、恰も生物の生命を養育するために、實際の食物の割當に變化があらねばならぬが如くであります。斯ういふ風に形勢を見れば、傳道者たるものは既早や、自らが以つて最善と考へるものが往々にして無視され、また心血を注いだ暗示と教導とが一見誤解されたのであるといふ風には、考へなくなりません。畢竟するに、傳道者が援助して形成する靈的人格は、傳道者自身のそれとは大抵全く異なるものです。そして恐らくは、傳道者自身の秘かに抱く理想的靈的人格とも異なるものでありましよう。茲をもつて、私ども自身によつて極めて本質的であり或ひは極めて卓越せるものと思はれるものでさへも、常に差し控へ目になされねばならないのです。甜菜は、成長の各階段におけ

る凡ての信者達に適當するとは云へない。單純に、その任務を果すために、非常な自己放棄を要します。それは寄り来る求導者達の眞意に透徹することゝ共に、彼らから學ぶことをも意味します。そしてこの事こそ個人傳道によつて私ども自身が淨化される部分であります。

然のみならず、指導の職務を爲す者ら自身が、通常、また成長と變化との途上にあるものであります。彼らはまだ目的地に到達してゐるのではなく、旅しつゝあり、また途々探検しつゝあるのです。それは一般に、多かれ少かれ、塵に汚れた一人の巡禮が、道づれの他の一人の巡禮を助けるのに似てゐます。この事について一切を知りつくしてをり、そして敬服してゐる學生に豊富なる學殖を扶植する令名ある教授と云つた風ではないのです。時には、私共のものに助言を受けやうとして来る者らのうちに、私どもの現在の信仰状態を遙かに越えた靈的經驗を有してゐる、若しくは然う見える者があるかも知れないの

です。或ひは傳道者自身が直接まだ經驗しないやうな深い祈禱の生活に導かれてゐる者があるかも知れないのです。神經的疾患もしくは宗教的虚榮の餌食となれる者らと、神秘的類型の宗教へ純真に心惹かれる者らとを、如何して區別しようとするのか。また後者の場合において——往々本人自身も茫然として、祈禱の深秘な境域へと神によつて惹き寄せられる人々の場合において——如何して私どもは、私ども自身も経験せしことなき宗教の領域において正に、斯くの如き人々の靈魂の要求する援助と指導とを與へうるでしようか。傳道者をして慎ましからしめる斯くの如き職務は、如何なる傳道者に何時降りかゝるかも知れないのです。斯くて、若し傳道者にして、宗教の教區的、倫理的、および人道的方面に、全然力を集注して、宗教の一層深い神秘に召し呼ばれてゐる多くの靈魂に與ふべき何ものをも有しないとすれば、それは怖るべきことではないでしようか。

この點に關して、心意的祈禱と靈的禱讀とにおける嚴格な個人的修練は、充分に是認さ

れます。私ども自身は山嶽へと召し呼ばれてゐないかも知れないが、然し單に全時間を平地に過し、敬虔の芥子種の佳はしい小さい畑地を耕すよりは、少くとも重い長靴をつけて、少しでも登攀を試みることによつて、やがて來らんとする登山者達に、一層善き助言を與へ、且つ登山者達を理解し得るでしよう。神に對する凝視の訓練されたる習性を、自己自身のうち斯く形成し且つ保持する者らは、おのが靈的筋肉を鍛練し、靈的諸感覺を生動せしめ、おのが任務を、聖徒達よりして學ばうと努める者らは、自己欺瞞の類型と、純真に神秘的な類型とを、識別する力を發達せしめます。この事は決して容易なことではありません。斯くのごとき人々は、眞實なものに遭遇する時に、それと認識します。そしてその有してゐる材料の源泉を探つて、これを正しく適用せしめます。自分自身よりも一層靈的に上達してゐる他の人々の靈魂を助けるために、人間の靈魂が斯くの如くに神によつて用ゐられ得ること、また用ゐられることは、毫も疑ひない。然しこれは人間の靈魂が、歸

依の祈禱によつて、靈的光の源泉に接觸してゐる場合に限るのです。私ども自身が或る程度において反省凝念の訓練を爲さうと努めない限り、神秘的な祈禱についての書を読み、そしてそれを敢て自分自身に適用しようとするのは、無益であり、實に危険です。斯くては、私どもはこれを理解してゐると思つてゐるが、實際は理解してゐないのです。私どもはこれを適用しようとするが、結局失望して憂ひるだけです。靈的の書は、靈の言葉にて書かれます。そして靈的に識讀せられねばなりません。それは讀む毎に新しい意味を與へます、そして私どもの多くは、多年を経て後に、漸く私どもの本來の誤謬の非常に大なるを悟ります。茲をもつて、他の人々の靈魂を指導するやうに、召し呼ばれた者らは、自らを、內的の祈禱の學校の謙虛なる學生たらしめねばならぬことが絶對に必要です。他の靈魂に對する指導者、支持者、また光を與へる者たらんとする靈魂にとつて、神の召命感が必要であるといふこの觀念は、寧ろ現代の英國の宗教生活より姿を消してしまつ

てゐます。それは現在においては教會の一分派においてしか行はれてゐない。而もこの分派において、頻りに不必要に、温室式と思はれる風に、行はれてゐるのです。靈的生命の蘊奥を傳へた僧俗の數多の男女達が、過去において、人々の靈魂に對して爲し遂げた細密な個人的傳道の業は、今や忘れられてしまつてゐます。私どもは各種の教育に多く關つてゐます。然し私どもは、親のやうに忍耐ぶかく、熟練をもつて靈を訓練し且つ養育することを全然放棄してゐます。けれども靈のこの忍耐ぶかき訓練法は、如何に美しく、いかに基督教的で、また如何に自然的な考へであるかよ！ 佛蘭西の偉大なる指導者達——フエヌロン、ボツスエ、フランソア・ド・ユ・サアル、ヴァンサン・ド・ユ・パウ——の業蹟は、この訓練法が何を爲し得るかを示してゐます、またそれが如何なる柔和な智慧、つゞましさ、柔軟性、心理學的洞察、非利己的な忍耐、および靈的堅固を要するかを示してゐます。彼らの指導の書翰は、確かに凡ゆる傳道者達によつて幾たびも繕讀せらるべきものであるが、

自然の世界と恩寵の世界とを、強き手にて組み合はす聖化された常識にて充滿してゐます。そして讀者らの靈魂を助けて、人生の凡ゆる平凡な境遇のうちに、祈禱と訓練とに對する材料と、實在に一層近づき得る機會とを見出さしめます。現代に適應せる形式においての、斯くのごとき個人的指導の信仰復興運動は、英國教會のうちに祈禱の生活を再興せしめるのに貢献することが大であらうと私は思ひます。そしてこれは、牧師傳道者達自らが、これを爲すに足るものとなるに非ざれば、復興は覺束ないのです。斯く爲す力を有する傳道者達は、久しからずして追隨者達を見出すに違ひありません。斯かる人々は直ちに人民に認められます、そしてこの種の追隨者達を、靈的賜物に對する全汎的飢餓は、續々もたらします。

さて私どもが考察し來つたことの要點を概括せしめよ。第一に、明白な眞理は、神の僕は、先づ自ら最善のものとなるに非ざれば、到底最善の力を發揮し得ない、従つてまた自己を深め、自己を修養することが、私どもの任務の中心であるといふことです。第二に、基督教徒にとつては、自らの最善の域に達することは、神の恩寵と人間の意志との能動的な協力と密接なる結合とに據り、且つこれを必要とするといふことです。素直な従順と決然たる努力とが、即ち私どもの祈禱の生活を支配せねばならぬといふことです、何故なれば、祈禱のこの生活の目的は「永遠的生命」の豊かなる奧義をいよ／＼多く理解し、受け、そして他の人々に頌ち傳へんがために、自己の内の生活を深め且つ擴大することであるからです。私ども自身の煩悶と誘惑、私ども自身が實在の閃光に接せんと努力すること、私ども自身が神の聖旨のために全然自己を没却する遁れ行爲——凡て此ら各種の淨化的行爲の結合より生ずるものによつて、聖靈はその聖業を他の人々の靈魂のうちに果し得たまふのです。何故なれば、これが即ち聖靈がその聖業を人々の靈魂のうちに果したまふ方法であるからです。

換言すれば、私どもの至深の生命は「靈」の世界に對する私どもの意志の響應です、そしてこの意志の響應は、即ち祈禱であつて、二つの主要な道によつて、その任務を果さしめられます、即ち神に對する愛と人類に對する愛とにおいてです——この二つの愛は終極において、またその最高の姿において、一の愛となりまゝです。遅かれ早かれ、度合は異なるも、神の力と代贖的精力との示されるのは、願望のうちにおいて、第一に神に、次いで他の人々の靈魂に、馳せ向かふ人々を通してです。そして生きて成長しつゝある人格的存在である私どもは、この神の聖旨を成就するために、いよ／＼靈化し、いよ／＼神の教を人々に説く力を得、いよ／＼深く眞實となるを要します。

これは單なる敬虔な發作ではない。これは怕ろしきまでに實際的な事柄です。神の國の實現に私どもが寄與し得る唯一の道です。人道主義的政策はこれを實現し得ない。神學的建て直しも、これを實現し得ません。たゞ聖潔のみがこれを實現し得るのです。そして聖

潔さしてこの成長のために、次の二つのことを一緒に實行することが必要であると見えます。即ち靈魂が内的に主の靜謐と平安とのうちに常住して主の慕はしきことを味得し且つ眞實に識るところの純眞にして安らかなる反省と、また若し私どもにして斯くの如き内的状態を保持してこれを他の人々のために用ゐようと欲するならば、堅固ならぬ人間たる私どもに必要な忍耐、努力および緊張、これです。この理想は極めて高遠にして、その完全なる實現を見たのは只一度だけであつた。而もこれは極めて弾力性に富んでゐて、その中において、發展の餘地と機會とを、凡ての忠信なる人は見出し得るのです。それは依着と離去とのいづれもの行動を意味します、他界的愛に對する依着を毫も緩緩することなしに、一切の私どもの現世的職責を極めて忠實に懇切に遂行することを意味します。そして若し私どもにして、斯くの如き處世法について一の理論的是認を欲するならば、確かにそれを「受肉」についての中心的基督教教理のうちに、見出します。蓋し、これは

永遠不變の神が、人格を通しての接觸によつて、被造物に到達し、これを捉へて永遠化せしめたまふのではないでしようか。人間に對する神的愛の直接的行動は人間を通してではないでしようか。また私どもを通して神の愛と聖潔とがいよく充分に表現されんがために、私どもが人格性において成長せんことを神は要求したまふのではないでしようか。そして多くの祈禱によつて支持されたる主の傳道の生涯は、この私どもの二重の窘境に對する人間的響應の古典的雛型を私どもに與へます。聖徒達はいよく、懸命にこの雛型に倣はうと努めたのです、そして斯く爲すにつれて、彼らの人格性は愛と力とに展開し且つ輝いたのです。彼らは、到底、私どもの理解し得ないところの、性格の成長と變化とを、歴史上において、私どもに示してゐます。而もこれは確かに基督教徒的規範であるべきです。多くの場合において、彼らは、その始めにおいては、普通な人々、時には見込なき人々でさへあつたのです。蓋し眞の聖徒は特別な創造でもなく、また靈的畸形でもないのです。

聖徒とは、畢竟、聖アウグスティヌスの偉大なる憧憬「わが生命は、汝に全く充ちて、眞の生命たるべし」が成就された人間に外ならないのです。そしてこの眞の生命、神との內的結合が成長するにつれて、また人類に對する聖徒達の一心同體の精神が成長するのです。彼らは喜悅に充つる祈禱と、神に悦ばるる純なる感情とにつゞまれて、離れて立つてゐるのではないのです。彼らは混亂の眞中へと飛び込みます、そして其處に、混亂の眞中にて、神を光射し得るのです、何故なれば彼らは神を所有してゐるからです。そして他の凡てのことを措いて、この事こそ、人々の靈魂を神に導き且つ癒やす私どもの任務であるのです。

Printed in Japan

昭和四年四月二日印刷
昭和四年四月五日發行

定價金九十錢

不許
複製

譯者 中山昌樹

發行者 東京市京橋區銀座四丁目一番地
エス・エイチ・ウエンライト

印刷者 東京府王子町堀ノ内八三五番地
折坂友之

印刷所 東京府王子町堀ノ内八三五番地
星光印刷合資會社

發行所 東京市京橋區銀座四丁目一
教文館出版所

發賣所 東京市京橋區銀座四丁目一
東京市河原町通一丁目十三
京都市河原町通九太町上
教文館

332
458

終